

特115

783

波
之
蘭
院



書業花江

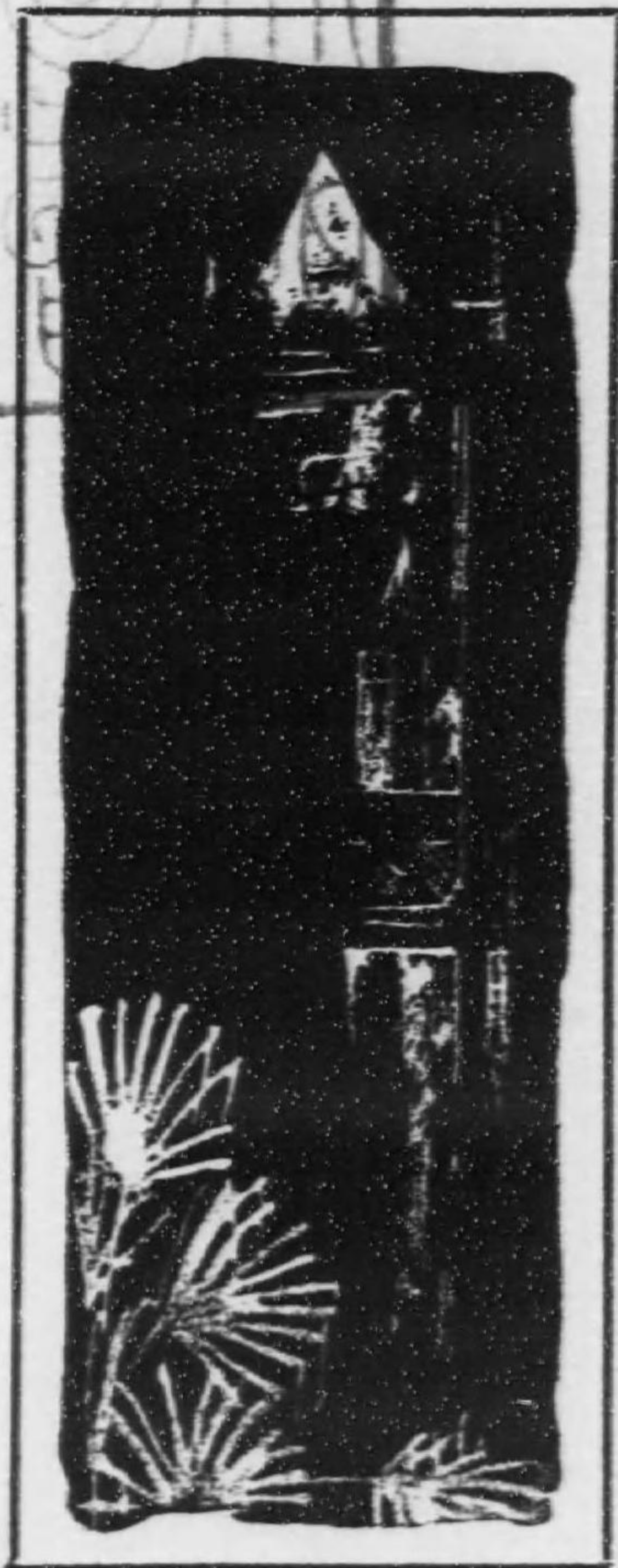
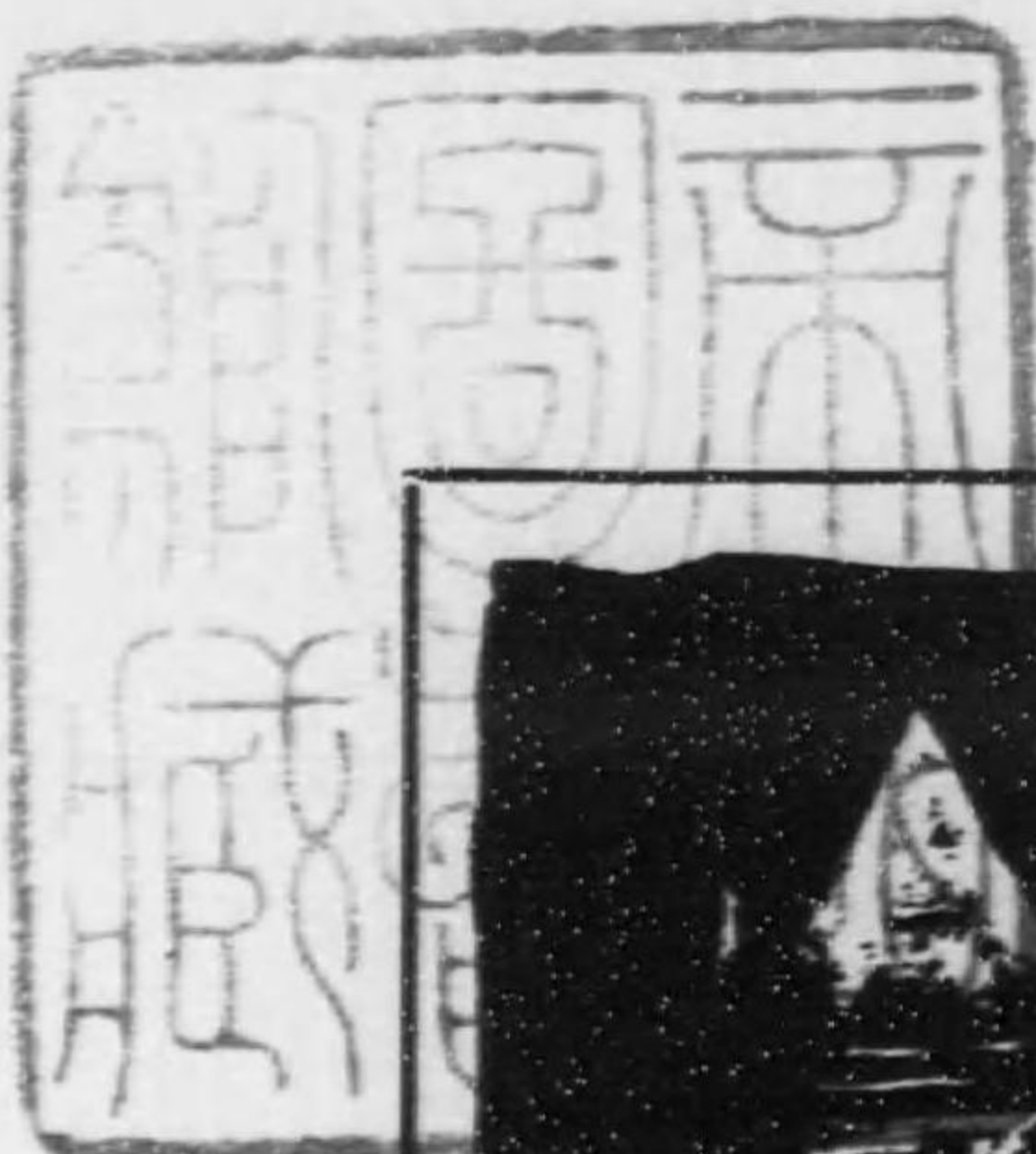
9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



露光量違いの為重複撮影

783
115

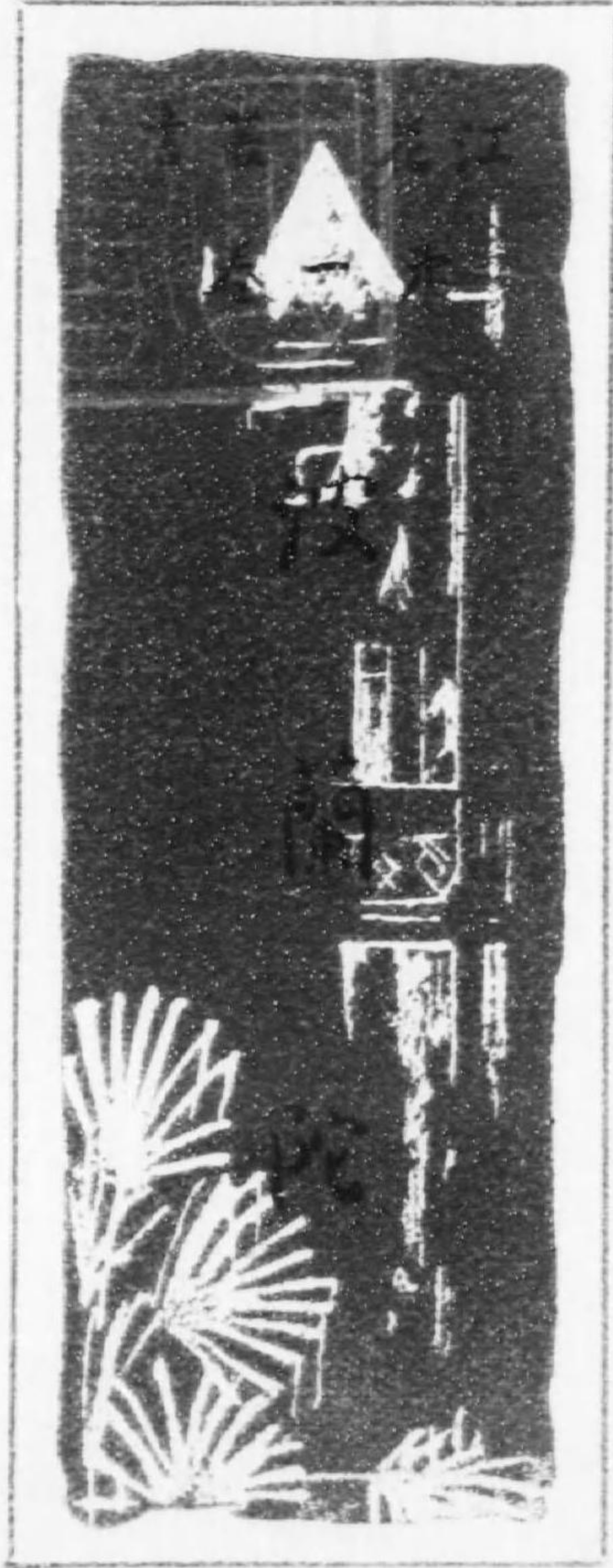


江
花
會
刊
行

大正
15. 4. 17
内交

露光量違いの為重複撮影

15
13



江
花
會
刊
行

六五
15. 4. 17
内交

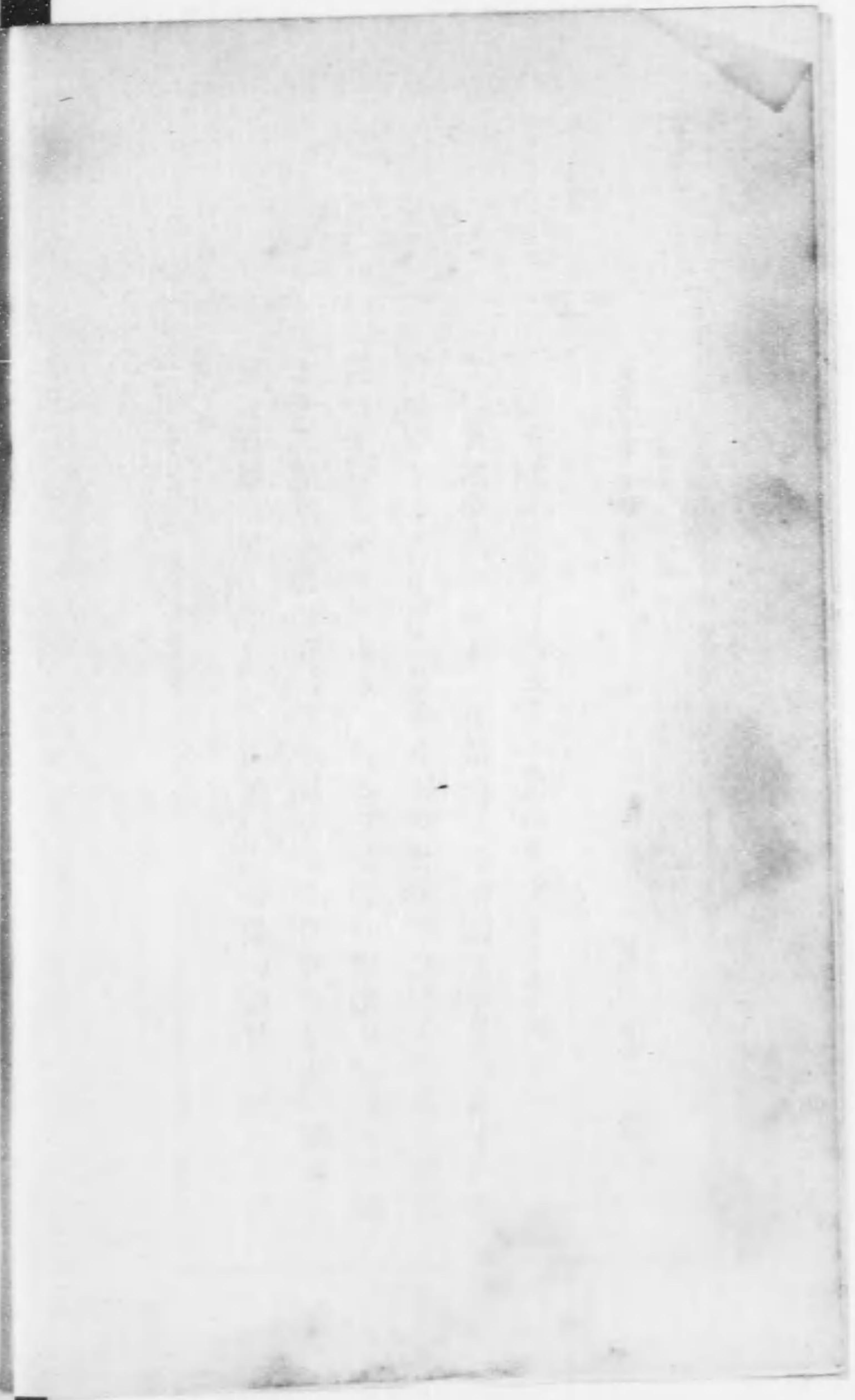
業に操觚に従ふこと二十五年、この長い歲月の間に一日
として文章を書かないことはなかつたけれども、何れも
拙いものばかりである、然るに是等の拙文を取纏めて續
刊分配せらるゝ爲江花會を組織せられた友人諸君の懇情
と、援助を與へらるゝ先輩恩人の眷寵とは眞に謝すべき
言葉を知らず誠に之れを一代の光榮として居る。

大正十五年陽春四月

江花井 上 忠 雄



江花館ニ於テ江花會發起人



目次

波郎君の死……………一
 或棟梁の話……………五
 清右衛門君……………八
 出水の騒ぎ……………一一
 風吹く原野……………一四
 附近の家々……………(一) 一七
 附近の家々……………(二) 二〇
 附近の家々……………(三) 二二
 附近の家々……………(四) 二五
 隨筆の尻談……………二八
 國境の巡査……………三〇
 人は小天地……………三三
 美術の論議……………三七
 吾亡妻の争……………四〇
 學海翁最辰……………四三
 學海翁の面目……………四六
 史海と孝謙……………五〇
 コロボツケル……………五二
 古い雜記帳……………五六

川上正十郎……………(一) 五八
 川上正十郎……………(二) 六一
 川上正十郎……………(三) 六四
 私の借家史……………(一) 六八
 私の借家史……………(二) 七〇
 私の借家史……………(三) 七三
 私の借家史……………(四) 七五
 私の借家史……………(五) 七九
 私の借家史……………(六) 八一
 私の借家史……………(七) 八四
 富山の洪水……………八七
 洪水の傳説……………(一) 八九
 洪水の傳説……………(二) 九二
 洪水の傳説……………(三) 九四
 洪水の傳説……………(四) 九七
 洪水の傳説……………(五) 九九
 越中の洪水……………一〇一
 叔羅の異説……………(一) 一〇四
 叔羅の異説……………(二) 一〇六

越中の地震……(一)……………	一〇九
越中の地震……(二)……………	一一一
越中の地震……(三)……………	一一三
越中の地震……(四)……………	一一六
越中の地震……(五)……………	一一八
越中の地震……(六)……………	一二一
地震と船……………	一二四
地震と英雄……(一)……………	一二七
地震と英雄……(二)……………	一三〇
地震と英雄……(三)……………	一三二
地震と天候……………	一三四
地震の研究……………	一三六
地震の香附……(一)……………	一三九
地震の香附……(二)……………	一四四
地震と大陸……………	一四六

編輯後記

挿 圖

江花會發起人の集會
江花會編輯委員會議
江花會住宅メランダ
コロネイブ
寫眞銅版
寫眞銅版

江花叢書
第一卷 波蘭陀

大正十二年八月編

井上江花著

波郎君の死

押野波郎君が死んだ。久しい以前から胃病だと云ふことは聴いてゐたけれども、胃病なら私の方が先輩格だから「君も胃病か」ぐらゐのところ、有りていに云ふと、大いに其の病氣を輕蔑してゐたのだ。然るに「最近いよ／＼わる／＼なつたので、一ヶ月ほど休ませて貰ひたい」と報じて來た。然し之れまでも時々胃病のために缺勤することはあるので、例によつて例の如くであらうと餘り念頭にもとめずにゐた。それが何うしたものか、或時偶と「押野は死ぬのぢやないか」との暗示を得たので、畑中君に對つて「押野君の病氣の様子は分かるまいか」と訊いてみた。畑中君は「藤本君が一番近くに居

(1)

るから、柳庵居士に見て来て貰ひ、場合によつて僕も見舞に往かうと思ふ」と答へ、之れも深く心配してゐるやうに見えなかつた爲、それきり今日に至つたところ、「滿洲にゐる押野の弟である」と名乗り一人の紳士が死去の知らせに訪ひ來るに遇ひ「さては」と思ふた。病名は胃潰瘍で、非常に多量の咯血があつた爲、押野君は今朝遂に死去した由を、其の人は丁重に報道した。つい二週間ばかり以前に平塚海岸に肺病の養生をしてゐる赤壁徳彦君が來訪して云ふには、死ぬ〜と傳へられた自分は今に死なず、却つて意外な人々が死んで行く。あなたの胃病も此頃は何うですか。東京では知人間に時折あなたの場合が出て、いづぞや大井冷光君や高田月嶺君などが、今度は先生も愈々可けないと言つてゐましたのに、見れば中々御健康らしい。然るにあなたの病氣の噂をした大井君がころりと死んだ。人生は分らぬものですねと語つた。まことに其の通りで、病人の私の目の前に、自分より年齢の低い人々が消えて行くので、變な感じがする。或老人の死んだとき大隈侯が「近火だ〜」と言つたと新聞に報道せられたことがあるけれども、侯は果して眞に自分の生命が近火に偶つたと感じたか何うか私には疑はしい。變な感じ

はすれども、同病者たる私の順番が差迫つたとも思はぬ。道理に於ては差迫つたと思ふのが至當であるけれども、直面するに及んでも割合平氣で眺められるものは死である。變な感じと云ふのは、少年時代から知つてゐる波郎君が、突然此世から居なくなり、最



早再び相見るときが無いと思ふことから生ずる人生感であつて、人生觀と云ふほどのものではない。押野君の小學校時代には、私の管理に係る夜學機關へ通ふてゐた。現に滿洲に在つて實業家となつてゐる元滿鐵社員の子田螢水君や、警視廳の警部となつて死んだ大森某君なども、そのうちに在つたので、是等の少年を引つれ、或時は海水浴に出掛け、或時は泊り掛けて山間の鑛山へ見學に往き、何うかすると夜間遠足を試みて卯辰山を一週したこともある、是等の少年は私を遊び友達とし、私からお話を聴くことを何よりの楽しみとして居たので、私が金澤を去るときには、川へ往つて魚を捕え、山へ行つて野草を採り來り、自ら料理して共に食ひ、大いに別れを悲しんでくれた「昔、君と一しよに金石へ往つたことがあるね、追憶

の爲に一度金石へ往かう」と先年私は波郎君に言つてみると「往きませう」と同意した此の約束を實行する機會は遂に得なかつたけれども、昨年夏松山の中學生が、北國の夏を見たいと云つて私方へやつて來たとき、其學生と私の家族一同をつれ川舟で島尾へ行く途中、伏木で波郎君に出遇ひ「君も來給へ」と無理から誘ひ行き半日を島尾で暮し海へも一しよに入つた。そのとき私の撮つた寫眞が即ち此處に掲載したものである、私はちつと波郎君の姿を眺め、金石の海へ入つた少年時代の「清ま」がこんな老けてしまつて、頭が禿かゝつたのかと呆れざるを得なかつた「金石の海で僕は大きな鯨を手捕にしたね、あんな奴は居るまいか」と云ふと「この海には居ませんよ」と波郎君は大した興味も無さうに答へた。その後定塚町あたりを子供をつれて歩いて居る同君に時々出くはしたけれども、氷見線出張専務のことゝて新聞社では減多に顔を見ず、私の宅へは入社以來今日迄に兩三度一寸立寄つたぐらゐで、他の何れの同僚よりも疎々しい状態になつてゐた。同君は小説風の文章が好きで、郵便局時代に、或田舎の電信技術員となつてゐたときの資料に面白いのがある。宿の放蕩息子と同道すると、君を待たせて置い

て或家へ夜這ひに入り込み、失敗して出て來る處などは奇抜だ。又いつぞや君の書いた隨筆のうちに、人生の不可思議に心を悩まし、野原の中を放れ馬か何そのやうにぐるぐると駆け廻つたといふ少年時代の回想がある。實際そんな事を行つたのか何うか、事實とすれば中々變つてゐる。そこで私は波郎君を哲學者と呼んだ。いかにも異彩ある男であつた。

或棟梁の話

十二銀行を背負つて立つた馬瀬清三郎さんが、今回勤続四十年と還暦に達した機會に、常務取締役を辭し、更に常務監査役に選舉せられることとなつた。その清三郎さんが先頃内々辭職の決心を私に語られたときに面白い談を聴かされた。馬瀬家は以前油搾を業とし、少年時代の清三郎さんは、家業の手傳ひに油を搾められたこともあるさうだ。私の金澤に居たころ、近邊に菜種油を作る家があつて、朝早くからカーン、カーンと搾木

を叩く音がした。静かな夜明けに耳に傳はつた、あの冴え／＼とした音は、今猶ほ忘れることのできぬ深い印象を刻まれてゐる。清三郎さんは夫れをやつたのである。然るに馬瀬家は都合により富山の中部から南端の中野方面へ轉宅し、矢張り油をぬめてゐられたが、中野の家と云ふのが、自信ある老練な大工によつて建てられたもので、其の棟梁は設計を作り、木拵えを終り、いよ／＼建前の當日に及ぶと、自身は羽織を着た儘、黙つて建前の様子を眺めて居た。と云ふのは十分の熟慮の下に設計し、細心の注意を拂つて木組みを終つたのであるから、自身の手を下さずとも、必ず何の故障もなく家屋が立派に建ちあがることを確信してゐたからである。果して夫れは何の造作もなく建ちあがり、些細の違算もなく差し狂ひも出なかつたさうだ。子供心に夫れを聴いた清三郎さんは非常に感心し、世渡りは宜しく此の棟梁の如くであらねばならぬ。自ら立てた計畫通り、少しの狂ひもなく誤謬もなく、きちん／＼とプログラムを實現して行くほど立派なことはない。事變に遇ふて狼狽するのは、設計が十分で莫かつたからである。そこで清三郎さんが四十年來十二銀行の柱石となつて働き來つた確實な行程をみれば、いかに

も棟梁主義であつたのだなと心付くことができる。最近私は自分の住宅を設計し、それを大工に建て／＼もらつた。建て／＼呉れた者は大工ではあるがそれですら自分の造つた設計通りの家が、次第／＼に出来あがつて行き、遂に完成せられたのを見たときに限りない愉快を感じた。私の新しい家へ來られた清三郎さんは、此の新住宅から聯想して件の大工談を持出されたのか何うか、其の邊は分らぬけれども、私に取つては場合が場合であつた爲、よく其の心持を汲むことができた。然し私自らを省りみれば、設計を立て／＼其の通りに家を造るやうな世渡りをしたことは殆どない。左へ向つて見たいと思ふて左へ向ふ、忽ち行き詰る。乃ち右に轉じてみやうかと考へ右へ向ふ、又行き詰る。行き詰る毎に設計が變つてくる。どうかすると設計などは面倒になり、漫然として行きつく所へ行くべく暗雲に進んでみたり、ぼんやりとして暮してみたり、無方針無企畫で人生の大部分を終つた。斯うした人間である僕の目から、建前を傍觀した自信深い棟梁のやうに、凡ての事業を筋書通りきちん／＼と實現して行かうとした、否現にそれを成し遂げられた清三郎さんのやうな人物を眺めると、驚かれるばかりだ。新聞には「既定の事實」

(8)

「豫定の行動」など云ふ文字を使ふ場合が多いけれども、或一事業に於ては兎も角も、人生其ものを、總て既定の事實化し、豫定の行動化し得るものは、驚嘆すべき非凡な人であらねばならぬ。

清右衛門君

押野波郎君の父なる清右衛門老人と、波郎君の二人の弟とで、私方へ來訪した。書齋に招じて、よく／＼是等の珍客を眺める。清右衛門は水色麻の紋付に薄羽織を着用し、長弟直次郎と次弟勇吉とは羽織袴で堂々と構へて居る。私は昔清右衛門老人をば「桶屋のをつさん」と云つたり「棺屋のをつさん」と云つたりしてゐた。と云ふのは家業として野道具及び棺製造をしてゐたからで、中にも野道具の註文に忙はしく、清右衛門老人はいつも店先で其の仕事に精を出し、勤勉力行の職人として附近の人々から知られてゐた。波郎君は出來上つた小さな葬具を大事さうに喪家へ持つて行くところがあるので「棺屋の清



江花會編纂委員會

向左より江花・笠原・眞夫・直堂・夢人

(*)

「豫定の行動」など云ふ文字を使ふ場合が多いけれども、或一事業に於ては兎も角も、人生其ものを、總て既定の事實化し、豫定の行動化し得るものは、驚嘆すべき非凡な人であらねばならぬ。

清右衛門君

押野波郎君の父なる清右衛門老人と、波郎君の二人の弟とで、私方へ來訪した。書齋に招じて、よく／＼是等の珍客を眺める。清右衛門は水色麻の紋付に薄羽織を着用し、長弟直次郎と次弟勇吉とは羽織袴で堂々と構へて居る。私は昔清右衛門老人をば「桶屋のをつさん」と云つたり「棺屋のをつさん」と云つたりしてゐた。と云ふのは家業として野道具及び棺製造をしてゐたからで、中にも野道具の註文に忙はしく、清右衛門老人はいつも店先で其の仕事に精を出し、勤勉力行の職人として附近の人々から知られてゐた。波郎君は出來上つた小さな葬具を大事さうに喪家へ持つて行くところがあるので「棺屋の清



會 員 委 纂 編 會 花 江

入夢・堂曉・堂直・夫眞・笠花・翁花江リよ左てつ向

まが又紙花を持つて往つた、どこぞに死んだ者があるのであらう」などと噂されたものだ。清右衛門老人は六十六歳なれども、體格巖丈にして血色も麗はしく、六十臺とは見えぬのに頭髮だけは薄くなつてゐる。波郎君も遺傳を受けてか矢張り頭の真中に毛が不足してゐた。直次郎は之れまた同様である爲、老成よりは波郎君に譲らぬ「直ち、直ち」と澤山さうに呼ばれながら、十二三歳の身で鉈を持つたり鋸を扱かつたりして、好んで家の仕事の手傳をしてゐた敏捷な子供が、こんなになつたのかと鼻の下に刈り込まれた髭の様子などを感心して眺めた「君は金澤に居るのですか」と問うと「左様です、商用のため全国各地を出歩きまして、あまり家に居らぬ方ですが、此頃は不景氣なものですから」と答へた。直次郎は五分刈頭で、顔の輪廓と云ひ體格と云ひ、清右衛門に酷似してゐるけれども、勇吉は髪を奇麗に梳きわけてゐて、容貌は波郎君に近い。此の二人は共に座談に長じ、中々よく語る。清右衛門老人も一通り談話のある方なのに、波郎君だけは不思議に寡言家であつた。伏木方面を擔當してゐた時分、故人になつた測候所長の大森虎之助君が私のところへ來て「このごろあなたの社から素人の記者が來ますね」と

言つたことがある。老練な奥井天風君のあとへ、寡言で愛嬌のない哲人波郎が出掛けたのであるから無理のないことだ。殊に大森君の秋田辯と來ては、外國人に接するよりも諒解のできにくいものであつたから、波郎君も之に辟易し、いよ／＼談話の調子を失つたのであらうと滑稽に感じた。何うも波郎君だけは同胞のうちの異型異彩であつたやうである。談話は波郎君の舊友の上に落ちて行つたとき、久しく滿洲に居たと云ふ勇吉は曾て鐵嶺に於て、波郎君の友人であつた千田螢水君に遇ひ、押野の弟だと名乗つたら、向ふでも驚いて種々と回舊談をしたなご／＼告げた。この間の記事に波郎君の遺兒を三人と書いたけれども、よく聽けば十四歳の娘と八歳の長男と二人であつた「子供を何うしたものか」と老人は言つてゐたが「母の手で養ふことのできぬやうな事情が起れば、直さんと勇さんとで、一人づゝ引受けたら好いでせう」と言つてみると「その事は左様です」と割合深い屈托もない様に見受けた。幸ひに兩弟共押野姓を名乗り他家を襲いで居ないから、直次郎君が亡兄の義務を受けつぐであらう。父子三人の立ち去るとき長男を失つた清右衛門老人にはまだ／＼幸福があると思ふた。

出水の騒ぎ

泥々蟲原野に移住してから最早四十餘日になるが、此の四十餘日の間に幾らも書くべき歴史がある。初め此の地に居をトせんとしたとき、古谷夢人君は私を諫止した。泥々蟲原野宜しからすと云ふ理由の重なるものは三つあつた中に、地理に屬するものニケ條、其の一は風力の強いこと、其の二は水害の虞あること、其の三は環境が感心せぬことにして。中にも水害問題は私に取つて可なりの脅威となつた「何でも屋根までも上るところださうです。船に乗つて避難せにあならんと云ふことになりはせんかと心配して居ます」と今にも濁浪滔々と押寄せ來るかの如き口吻であつたから、憶病に於ては天下一品の私のこととして「それが大變だ、早速断りませう」「それが宜しいでせう、いろ／＼の變死の内でも大水に流されて土左衛門となるなどは一番不景氣ですから」とあるので、一度は地面の買約を取消してみたものゝ、一方の杉本大工は斯うした批難をば匏で削るやうに打消し「あの邊は水の出ぬどころです。明治二十九年と三十二年の洪水には浸きま

したけれども、それから後には一度も水は来ません。大丈夫そんな心配はありません」と受合つて呉れたので、遂に決心して移住したのであつた。すると先般の出水騒ぎで、當日朝食の膳に向つて居るところへ、夷子三郎のやうな耳朶をさげた金森表具翁が土砂降りの中をやつて来て「二塚の堤防が切れたと云ふから、今時分此邊は水の中になつて居るだらうと思ふて来ました」「どうだらうね」「まあ浸くと思はねばなりませんまい」と云ふとだ。次に來たのが大工町の高田友太郎青年で「二塚は切れたさうです」と警告を與へる。そこへ又大鋸屋町の吉田嵐風君が五六年振りで珍らしい顔を見せ、かゝる場合に際し一働きやつてみせんづ意氣込を示し、それから荒木、荒井、室谷の諸君が續々駆付ける。すると電話のリンが鳴り響き、夢人君の聲で「人夫が要りますれば二三人やりませうか」と云ふ。最早泥々蕨原野が水中に没したと早合點してゐるやうだ。雨は間斷なく降り續くの、誰の口からも水は出る／＼と云ふ。近邊の畑中君方では既に建具を二階へ上げ、隣家の荒井君方では、建具も疊も、道具も二階へ上げ、味噌桶までも天井裏へつるし上げられ、一方の隣家上阪君方では道具だけを始末したとの報だ「向ふの方

の新家屋では、とくに残らず準備ができた。博勢町では道具を運び出して居る。水は案内無しで來るから、今のうちに始末したら何うです」と勧める人が多いので。それでは兎も角も建具だけ外づさうかと戸障子を外づして二階へ運び押入れの箆筒も持つて上つた。然るに雨は漸次小降りとなり空模様も恢復の兆が見えたから「これなら大丈夫だろう」と御苦勞さまにも又二階から運びもどし、遂に一日を水騒ぎのうちに經てしまつた。そこへ杉本大工君がのつこりと來て「この邊へ水なんか出るもんですか、今後の事も有りますから、決して騒いではなりません」と沈着に構えて異見をするから「こんな人に人を騒がせた根本は其の表具屋だ」と責任を夷子三郎君へ嫁してみろ「そんな事を云ふけれども、大工さんが早く來て居れば一番になつて騒ぐのだ」「いやそんな事はない。今日は早川の御坊へ仕事に往つてゐたので、水が出ると思へば行く筈はない。出ぬ事が分つてゐたから往つたのだ」と恐ろしく眞面目な顔で自信振りを見せた。夷子三郎君は少々間のわるいやうな体で、酒に紛らし「あつははは」と笑つた。日が暮れてから夢人君が來て水見舞を述べ、こゝら一面の大海にならなかつたのは不思議な僥倖のやうに祝

はれたから「決して浸水せぬと思ふたけれども義理合に少しばかり建具を片付けました」と私の持前の負惜みを云ふと夢人君は「へー、へー、へー」と淨瑠璃のやうに節の付いた挨拶をして去つた。然し隣家の味噌桶は、尙萬一を慮かり此時迄もまた天井裏に下がつてゐた。

風吹く原野

過日の出水騒ぎに、泥々蟲原野は先づ無事で終つたけれども、今後のことは何とも分らぬので、姑らく未決の問題として置く。然し夢人君が戒告の一個條に算へた風當りの烈しいとは、正に其の言葉の通りであつた。併もそれは主として西風で、稍南寄りのやうに思はれる、即ち西々南の風が多い。此の風は晴天のときにも、雨天のときにも吹いて来る。程好く吹くときに、西のガラス戸を開けて置けば、室内全部に通風して、暑熱を拂ふけれども、強くやつて来る日の多い爲に、庭に植えた松の枝は三四本も折取られ、白藤の盆栽などは葉を枯らしてしまつた。隣家の上阪君方では、父翁の丹青で菊の栽培

をやつて居られるが、風の吹く日には、その盆栽の鉢を東の縁側の風蔭に置かれる。同君方の野菜畑なども、矢はり此の西風の爲少からぬ妨害を受けるこのことである。或日の午後風の吹く折近邊の畑中君を訪ねると、西の縁側の雨戸を締切られ、その雨戸は中央にガラスを箝めただけのものであるから、明るい筈の室内が甚だ陰氣であつた。それ故人々は私に向つて庭の西側に風除けの樹木を植えるがよいと勸めて呉れるけれども、樹木を植える資金の無いのと、時季のわるいので、已むを得ず見合せて居る。秋になつて若し財政に餘裕ができるならば、丈けの延びる樹木を入れたいと思ふ。近邊では隣家の上阪君方に柿の大木が一本、風除けの守り本尊のやうにぬーつと西庭に突立ち、荒井畑中兩家の裏には七八尺の桐が二三本ある。之れらとても防風樹としては未だ何程の効力もないが、私方の皆無に比ぶれば、末頼もしいところもある。殊に上阪君の柿の木に至つては、移植のとき坊主刈りに枝打ちしたあとから、昨今新芽を出し、青々とした葉が茂つてゐる。風の攻撃は西風ばかりでなく、六月には北風の猛烈なのが大雨を送つて北向の部分に随分酷い雨漏りをした。午前二時頃に起きて建具を外づし疊を揚げたけれ

ども辛抱しきれず、三時過ぎに風雨を冒して大工を呼びに往つた。すると其の風がやがて南の方向に轉じ、今度は家の南側から雨漏りを始め、新開地の南端にある鈴木君の家も同時に多少の吹込みを受けた。之れで先づ風の洗禮は終つたわけである。町のうちに居住した時分には風が吹くと家ちうが砂だらけになつたものであるけれども、現住のあたりは田浦であつて、併も昨今は青田ごき、風上に新道は開かれたが、その新道に盛られた砂利はまだ其の儘で土中に沈まぬ爲、幾ら風は吹いても町うちのやうに砂煙は立たず座敷も割合に穢されぬ。それだけが取り柄だ。強ひて困ることを云へば蠅が多い。田浦に蠅の多いのは怪しむに足らぬけれども、西風に吹かれた蠅が裏田浦から屋内にたちこみ食事ごきには取わけ煩さい。蠅の外に青蛙が飛込み、毎朝掃除をするごき疊の上を飛廻つてゐたり、ミイラのやうに干せ死になつたりしてゐたけれども、それは一時で、昨今は青蛙の數も次第に減少したやうだ。一時は例のやかましひ毒蛾も來た。あらゆる種類の蛾の群は今尙電燈の光りに誘はれて集まつて來る。随つて食事は早く片付け燈下の飲食は避けて居る。蠅の集まるのは厭はしいことであるが、田園生活の一の趣として忍べ

は忍び得られぬでもない。

近邊の家々 (一)

泥々蟲原野の新住民は、まだ其の數が極めて少い。東に向いて其の家を建てられた五軒組の、北の端は上阪君である。上阪君の家は上阪君の姉婿である小島君獨特の創意に成つた建築で、兜形の家と呼ばれ、又一名を眼鏡の家とも稱せられてゐる。主人の上阪君は或役所に勤める役人で、本文に屢引合ひに持出す夢人君の同僚だ。但し夢人君は上阪君の上役である。その他、其の役所には「泥々無志」に現はれた、水滸百八人の豪傑のうちのインキ君や、定塚町大佛のアーケ燈で便所を照す重實な設計の家を拵えたY君や切支丹巴天連の尖り洋館を建てたM君や八卦九星の大家地鎮齋K君や北海道旭川へ旅行して殿様扱ひにせられた中川の森の中のY君なども皆同じ役所の人々である。右のうち夢人君と上阪君とは話術の達人で、いづれ劣らず話が上手である。その談話の巧み

な上阪君は、新宅引移りの後、役所へ出る毎に、日々一くさりづゝ泥々蟲原野の禮讃を始めるのださうで、或時は裏の田圃川に鯰が勢揃ひをすることを述べ、一尺ばかりの鯰ならば、小さな小僧共が夜分になると一時間はどの内に一人で二三十も捕へる。其の他鮒や、鰯や、鰯などは無数である。その爲川魚料理に飽き果て、此頃は腥いオクビが出て困るなどと羨ませ、或時は暑さ知らずの風が吹きつゞけ、夜になると寒いくらゐだ。二階の座敷から田圃を眺めると、恰も海岸の別荘に居て海の景色に對するやうで、稻の波の風に揺れる原野を隔て遙か向ふの民家にちらり／＼と灯の見えるのは、宛ら海上に浮ぶ船の舷燈だ。南方の鐵道に遠くから汽車の轟くのは、波の音と間違へられるなど羨ませたこともある。又或ときは堀抜から滾々として湧き出づる玉の如き清泉に、ビールを冷してぐつとやれば、千悶萬惱立ちどころに影を消し、甘露の味は五臟六腑を滋潤し、壽を延ぶること百歳千歳なるべしなどと羨ませたこともある。之れを聽いて同僚諸君は嘆賞措くところを知らず、中にも夢人君に至つては、例の得意の「へへー、へー、へへー」を平素以上の節付けにして感心すること夥しく「それでは一夕の歡を君のどこ

ろで共にしませう」と、共有財産某圓なりの豫算の範圍に於いて川魚料理を誂え、夕景から乗出して來た。來たも來た、一同が自動車で兜の屋形へお成りになつたので、泥々蟲原野の蛙や蚯蚓共は驚くこと一方ならず、稱してレコード破りだと風評し合つた。此事あつてから上阪君の嚴父は、更に又謠曲友達を集め、且つ謠ひ且つ談じ、然る後盛宴を張られたらしい。氣焔あがること最も大なるものは即ち上阪家である。上阪君の容貌は誰かに肖てゐるので、長らく考へた結果、それは小島君の長女なる嬢さんそっくりであることに心付いた。いつぞや小島君は、愛嬢の容貌が父母の誰にも肖て居らぬと云つたが、奥さんの同胞、即ち叔父肖であつたのだ。然し上阪君の顔は其の嚴父に似てゐないところから推すと、亡くなられた母堂のタイプかも知れぬ。小島嬢によく似た上阪君は天性の器用人で、盆栽をやる、畑を作る、土工、大工行くとして可ならざるは無しである。隣りに住む無精者の私は、朝な夕なに上阪君がさま／＼の勞働に従事し、さま／＼の仕事にいそしむ姿を見て、絶えず有益な鞭撻を受けて居る。

近邊の家々

(二)

上阪君は朝起きると直ぐ庭園へ飛出し、晩景役所から歸宅すると、又庭園の仕事に取りかゝるので、それが四つ目垣一重の私のところからは能くわかる。初めのうち庭へ出るときに黒縹子の事務服を着たり、レインコートを着たりしてゐたけれども、昨今は裸形である。併も體格が中々立派なので、上阪君の裸かは藝術品である。大いに感服して居る次第である。黒色の事務服は不思議であつたけれども、夫れもだん／＼考へてみると同君は以前郵便局員であつたから、その時の遺物だなど合點ができた。或時堀抜きの横手でごり／＼と鋸を使つてゐるので、便所の窓から覗いてみると、薪を切つてゐるのであつた。以前は舊式竈であたのに、新宅では改良竈に改めた結果短い薪でなければならぬこととなつたから、長い割木を引いて居るのだ。翌日「お精が出ますね」と云ふと「大分挽いて置いたのに直ぐ無くなります」と同君は笑ひながら口説かれた。でも鋸の使ひぶりは非常に熟練なものである。そのうち、何處から才覺して來たのか知れぬけれど

も、一丈以上もある長い板を擔き込み、切るやら叩くやら、ごり／＼／＼／＼とやつてゐたと思ふと、ちやんと植木臺が仕上つてゐた。そのときは二階から顔を出して「大工が泣きますぞ」と云ふと「やあ」と上阪君は答へたが、翌日父翁丹青の菊の鉢植は其の臺の上へすらりと並んでゐた。一番面倒らしかつたのは干物の棒杭で、之れは二日間で仕上り、西裏のよく夕日の當るところへ立てられた。花壇は前の塀裏に設けられ、畠は私方に近い南側に打たれ、今は茄子と胡瓜とが植はつてゐて、上阪君が胡瓜の棚と蔓豆の垣を拵えたのは餘ほど以前のことである。土壌の良くない爲か、肥料の足らぬ爲か、畠物の成績は十分でなく、カリモギのやうに貧弱な胡瓜がぼつ／＼と成つてゐる。好くできてゐるのは蔓豆ばかりだ。然し盆栽の土だけは、特に中川村の農家から取寄せ、其の土を篩にかけ本式でやられた。土篩ひの技師として或早朝小島君の次男坊なる快少年が聘せられたのか、或ひは押しかけて來たのか、大働きで手傳つてゐた「くらうとだね」と云ふと「こんな事はいつも學校でやつてゐる」と技師は答へた「之れ／＼もつと精出して篩はんと日備賃を拂はんぞ」などと上阪君は戯れる。何でも菊の盆栽だけは上阪君

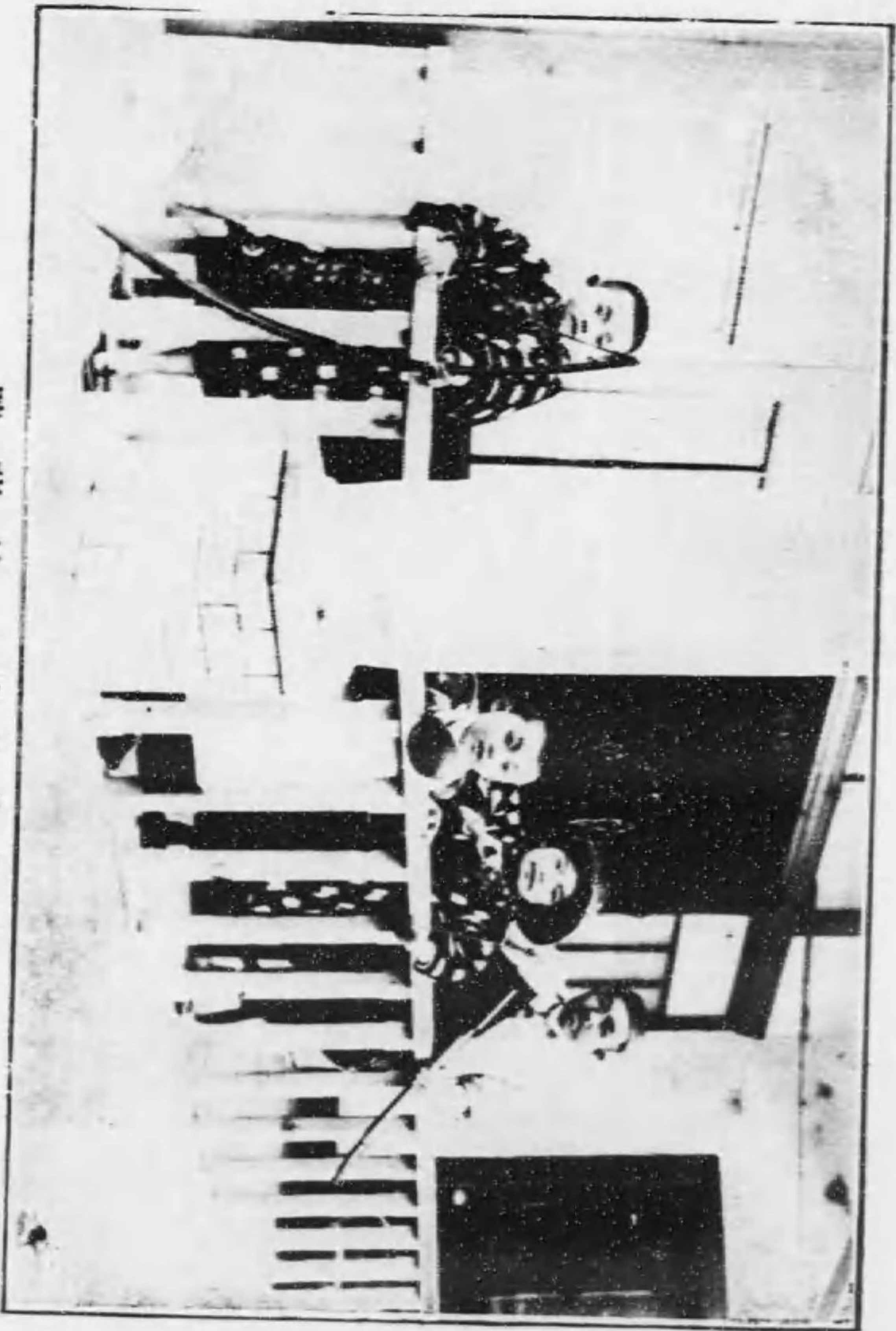
の父翁の擔任で、其の秘傳は亡くなつた母堂からの譲りであるらしい。上阪家は若い夫人と、四才の嬢さんと二才のアカちゃんを合せ、一家五人の圓滿申分なき家族である。私は時折塀の開きから前庭へ闖入し、野菜畠や盆栽を拜見する。庭には前述の柿の木の外に、六七本の小さな松と、楓と杉と、いろ／＼の草花とが其處此處に賑やかに場所を取つて居る。

近邊の家々 (三)

一方の隣家は荒井天望君の住宅だ。富山には私の知人に山田望天君なる仁があつて、この先生は強度の近視の爲か、道を歩くにいつも仰向き加減で、恰かも常に天を望む者の如くである。望天の雅號は多分そこから出たのであらうが、荒井君のは、望天を引繰り返した天望であつて、天を望むにあらず、天下の望みである。徳川時代ならば差向き由井民部輔橋正雪どころで油断のできぬ代物と睨まれたかも知れないが、其の實當人は

近時流行の主義者にもカブレず、小心翼翼々、朝から晩まで黙りこくつて會社の仕事に精を出し、お午になれば辨當を食べ、小便をしたくなれば便所へ往くほかに、聊かだも怪しい點のない保證レツテル付の人物と來てゐる。借問す、此の如くにして天下の望みでもあるまいがと言つてみたことは無けれども、言つてみたことで、恐らく唯にや／＼と笑つて答へないであらう。然し君は理財に長け「この界限の才覺者、智慧の廻りは外面からわからの蒸氣船のスプリン」とでも西鶴ならば永代藏か胸算用位に書きさうな勤勉の化身、其の家族はサンガー女史の高説に待つ世話なき、一女兩男の丁度よい子寶と、夫人と母堂、その又夫人が古今の賢妻にて、腕の利くことに於ては夫君の器用さに劣らず、掃除、洗濯、菜圃の世話、臺所の切りまはし、何から何まで迅速にきちん／＼と片を付け、それで綽々たる餘裕を示し、たまに門口を覗くと「まあちとお上りなさいませんか」などと如才なき應接ぶりまで中々うまいものだ。荒井家の構造は、階下三室階上二室、嘘ではないかと思ふほどの豫算で、之れだけの家がみんなと建ちあがつたところは天望君の密慮に寸分の遺算の無かつたことを證據立てゝ居る。唯玄關上り口が直ぐ茶

の間で茶の間と六疊の居間との界になる、鴨居の上の壁のまんなか、工事の都合で材木が一本横に半面を現はしてゐるのは目觸りだ、どうかならぬものかと天望君苦心の折柄、兜屋形の設計者小島君が「それはわけもない事だ」と持合せの智慧を小出しにして「鴨居の上に棚を吊ればよいではないか」と教へた。尤も天望君とても利用の道に抜かりなければ、棚を吊ることは夙くに承知であつたけれども、左程に必要を感せざる棚をば單に材木かくしの体裁に用ふることを躊躇したのであつたと認める。その一例として空地の一半を庭園に、他の一半を採算的野菜畠に開き、そこから既にさまざまの畠ものゝ收穫をあげてゐる、この菜園をば、畑中君方の二階の縁側から見下すと一見えであつて茄子がいくつ出来てゐると云ふ事まで明細に判る。私とすると同君方との間には板塀を建てた爲、日夕上阪君方の行動を観察するやうなわけに仕かず、塀越しの物干杭に洗濯物をかけたり蒲團干などをしてある体を眺め夫人の活躍を卜するに止まる。随つて記事材料も極めて乏しく、土用丑の日に鰻食會が行はれたことさへ、數日後に及び漸く情報に接したありさまだ。この鰻食會は同僚の經費割當分擔のもとに成り立つたものにて、天



江花翁住宅の波蘭園
盛野土産な持つて

望君は特に素麵を馳走し依つて以て大いに飲み、且つ談じ且つ唄つたさうだが、私の耳には當日纔に巨眼公と稱する地聲の大きな男の高笑ひを聞いたばかりであつた。

近邊の家々 (四)

天望君方の隣に杉本大工の作事場があつて、その次は島田壁屋の所有地、壁屋の地面は當分畑にして野菜を作つてある。それから畑中鈴木兩君の同じやうな外形の家が二つ列んで建ち、何れも二階建であるが、慾を云へば二階は西に面してゐる爲、前通りから見ると家の體裁が少々可笑なものになつてゐる。前は板塀で圍み塀のうちには小さな前庭、前庭に對つて六疊の居間、居間の奥は後庭に面した八疊の座敷、座敷は三尺に六尺の床で地袋があり、縁側からは臺所へ通づる。玄關を上げれば取次の間があつて、臺所には横手に勝手入口が付き、そこに二階への階段を設け、六疊床付の二階の縁側には勾欄を付け、佐野村の郊外から西礪の山々を背景に、青田の昨今は一望の綠美はしく、一寸した

眼病や、軽い頭痛ぐらゐは、そこに座つて氷水の一杯も飲めばけろりと癒るだらうと思はれる。道理で二階の室を前に取らなかつた筈だ。但し其のため西の風を受けること夥しく、伏木側候所長若崎君が「昨今の西風」てなとを講釋した折の畑中君方では、二階の雨戸を締切つてあつた。畑中君の家族は、夫婦に小學校二年生の子息及びジョンと呼ぶ茶色の四足、子息は田甫川へ飛び出して鮎を掬うことが得意、四足は近所を駆廻つて畑を荒すのが得意。主人公の最大得意は晚餐の杯を舉げるに在つて「まあ一本です」とは内輪の挨拶で、相手あれば十本二十本も亦辭せぬ。酔ふて陶然として亂に及ばず「畑中君は強い」と評判されて居る。夫人は丸髻の極めて似合ふ艶にして併も清楚の美人、或朝同君方にはかん／＼と發動機の爆發するやうな響きを立てたので、何事なんめりと私方から物見すると、二階の軒に巢を掛けた醜惡の蜘蛛をば奥さんが拂ひ落とし「この奴め／＼」とトタン屋根に落ちた件の怪物を箒で叩くのであつて、その光景は千本櫻の静御前が忠信と見せた妖怪御參なれど、薙刀小脇に屹つとなつたところに似て居つた。畑中君の隣りに住む鈴木君は、前年夫人を喪ひ獨身生活を營んでゐる。凡そ男やもめに

蛆がたつと云ふから、野郎の獨居は恐らく趣味のないものだらうと相場を踏み、且つは迷惑のほどをも慮り、不意の闖入を避けて居る。先般出水騒ぎの際、鈴木君方だけは寂として、をちつき返つて居るから、何うしたのだと戸を叩いてみると、主人公は家に居らぬ。はゝあ夜前から家を明けてゐるんだな、甚だ以て怪しかる次第と、岡焼半分で詰問してみたが、それは飛んでもない濡れ衣、當朝は常よりも早く勤め先へ出かけたので眼中水害なく、水がついたからとて心配の無い獨身は斯様に暢氣なものでござると答へた。それは嘘で無かつた證據に、騒ぎが次第に大きくなつたころ、のこり／＼とヤモメ樓へ立戻つて来て、唯一の財産たる徳利ども押入れの中へ始末するのか、しばしかたことと音をさせて居たとのことである。然しながら蛟龍豈地中のものならんや、獨身生活の爲勝手出入口まで付いた住宅を築くことはよもあるまい。畑中令夫人が軒端の蜘蛛を叩き給へば「をゝ嫌なや」と、座敷へ入つた青蛙をこわ／＼追ひ立てるやうな人を見ること近き將來にあるべしと、日露の提携に保證を付けるやうな豫言をして置く。

隨筆 屁談

此頃は餘り流行らぬが一時は新聞雜誌によく名士の愛讀書十種と云ふものを問合せて發表したことがある。それを見ると概して世界的に有名な大著の名を擧げる者多く、外國書ならばダーウ井ンの種の起原などは殆ど言ひ合せたやうに取入れてあつたものだ。然し熟らく、惟ふに、愛讀書と忠臣藏には表と裏のあるもので、從來發表せられたものはあれは皆ヲモテである。食物にしたところで、君は何が好きかと聽けば、鯛の刺身、鶴の吸物、鰻の蒲焼など答へるはヲモテであつて、澤庵漬、ふかし薯、糠漬鯨など云ふはウラである。私は人間が下品であるためヲモテの愛讀書よりもウラの愛讀書が多く、夏日は納涼の意味から殆どウラの愛讀書ばかりを手にしてゐる。私の云ふウラ本の種類は第一が隨筆で第二が日記、第三が旅行記だ。隨筆と云つても、理窟を云つたり教訓をやつたりするものは敬して遠ざけ、肩の凝らぬタワイの無いものを歓迎してゐる。古いところでは徒然草なども悪くは無いが、文化文政時代に新聞雜報切拔帳式の面白いもの

があつて、それから降だると天保年間に雀庵の「さへづり草」のやうな貴重なものがある。雀庵は俳人であつたけれども、驚くべく趣味の多方面な人物であつたと見え、さへづり草には動植物に關する考證から、考古學の領分にまで進み、古墳古瓦の調査、史傳、語源、宗教、迷信などの研究など、到らざるなく及ばざるなく、滑稽なものになると放屁考は振つてゐる。之れは東大寺興福寺の古瓦のことから、青丹吉の八重櫻に及び、奈良の文字からお奈良に移り、放屁藥放屁の差別と轉がつて行つたので、讀んで罪がなく愉快千萬だ。放屁をお奈良と呼ぶのは、伊勢大輔の有名な和歌に「けふ九重に匂ふ」とあるところから出たもので、奈良の上に「お」の字を加へたのは女ことばの常だ。言葉の出所の不明なやつは大抵斯うした所から來てゐるとは雀庵の説で、次に安永の頃放屁男と云ふ屁の名人が、關西の興行に大當りを取つて江戸に出て、兩國で開演したところ一代の人氣を引いたと云つてゐる。そんな物を珍しがつて、ごし／＼押かけるとは暢氣な時代があつたものだ。小屋の前には旗幟を立て、看板には尻を立てた男の姿を書いてあつて、中へ入ると太夫は緋縮緬の襦袢で高座に座して居つたさうだ。雀庵曰く、按ず

るに人は一小天地にして、天の雷鳴、地の地震、時に取つての發氣にして音あるも音なきも、其の理屁と共に一也と。人を小天地とするは雀翁の癖であつた。既に天地自然の理法なるが故に「發せんとする屁を止むるは養生の道に甚だ不可なり」と辯じ、尙安永の頃大阪の藥店千種屋に「放屁藥」の看板を出してあつたと云つて居る。放屁男と云へは、僕の幼年の頃「屁や屁、屁は要りませんか」と屁を賣つて歩いた男の話をもつて聞いた。何でも其の男の屁は梯子屁に初まつて四十雀の鳴き聲に至るもので或大名の賞讃を博したと云ふことであつた。

國境の巡查

近頃また平安北道の清城鎮に鮮人隊の襲撃を受け、駐在所の或巡查は射殺せられ、他の一巡查は重傷を負ひ、鮮人の良民も傍杖を喰つて殺されたと云ふことである。朝鮮國境の巡查ほどの不安な職務は多くあるまい。然るに辛抱してそれを勤めて居るところは見

上げたものだ。今春渡鮮の折、齋藤總督は恰も國境平安北道を巡視して京城へ歸つて來られたところであつたが、總督に隨行した丸山警務局長は「國境の警察官には涙の出るやうな事が多い」と言つたばかりで、其事實に就て何とも語らなかつたけれども、涙の出る哀話と云ふのは、何れも皆巡查の賊難殉職である。鴨綠江岸の國境地に勤務する警官はどんなにして鮮賊に襲はれるのか、夫れは大抵型が決つて居る。今回の清城鎮事件は、三十名許りの團隊で突然對岸から渡つて來て、郵便局を焼き駐住所を射撃したとある。所謂涙の出る話の舊邑事件が矢張り此の筆法で、今年一月の某夜、對岸から渡つて來た數十名の鮮賊は先づ駐在所を攻めた。この時六名の所員中四人は江岸の警備に出て居て、残り二人の巡查と、其の裏手の宿舍にある巡查の家族の女子供であつたから、衆寡敵せず、味方は刻々に危険に近づいたとき、伊津野巡查の妻のシナ子は宿舍で二人の子供と寢て居たが、短銃を取つて飛び出し、他の巡查を援けて賊と應戦し、遂に弾に中つて斃れた。然しその爲所員は賊魁一人を討ち取り、他に味方の損害なく賊團は引揚げた。妻を討たれた伊津野巡查はまだ同所に在勤して、齋藤總督から慰問の言葉を聴き

「私は妻の靈を慰める爲、どこ迄も匪賊と戦ひます」と言つたさうだ。それから昨年六月十三日の夜の含井事件の記憶を、甲山警察署詰の一巡査が手記したのを見ると、更に賊來の調子がよくわかる。その夜會麟駐在所受持區松溪里に數名の鮮賊が侵入したとの急報に接し、甲山から四名の巡査が自轉車で飛んだ。暗夜の惡路を約三十分間で現場へ着くと、松溪里の一民家を荒して立去つた後であつたので、戸口調査を行つたけれども犯人不明の爲、同巡査等は十五日も調査を續行し會麟駐在所に宿泊して居ると、其の夜附近の含井駐在所を二三十名の賊團が射撃したとの急報に接し、自轉車で駆付けると駐在所は全焼し、同所の一巡査は死体となつて倒れ、他の一巡査は重傷を負ふて民家にうなつてゐた。賊の射撃を受けたときに一巡査は枕頭の騎銃を持ち扉を開いて應戦せんとしたところを打たれたので、他の重傷巡査は銃聲を耳にし、附近から駆付けるところを鮮人の爲に射撃せられたのだ。尤も國境の駐在所には巡査數名が詰めて、巡査部長が指揮するなど、一巡査制の内地の駐在所と同日の談ではないけれども、何分交通不便にして道路もわるく、内地のやうに一里二里で本署へ達せられるは少なく、五里十里を隔

てるものが多い。それ故何時何處から突然賊團が來襲するか豫測することもできず、來襲すれば必ず我れは衆寡敵せぬ。さればと云つて急を本署へ通しても應援の到着するときは立去つてしまつてゐるから間に合ふ筈はない。今度の清城鎮では、犬の吠える聲でそれと知り機敏に追撃して、江岸に退却し船に乗らうとする處を射撃し、船の下流へ押し流されたところを包圍して巨魁を捕へ、四名を射殺し、二名に重傷を負はせたと云ふから餘程うまく行つたのである。私の朝鮮へ行つた頃、京城に於て殉職警官招魂祭なるものが行はれ、鮮賊の爲に殺された勇士に對し髣髴として來り饗けよとやつた。生大根と鯛を並べ來り饗けよは好いが、大根と命と交換し、以て瞑するにはいかにも可哀相だ。國境の巡査に僕は同情する。

人は小大地

人間を以て天地に喩え「人は一小天地」であると説くことは、雀庵の專賣ではなく、儒

者は大抵それを受賣りした。加賀藩に居た太田錦城なども其の一人で、錦城は當時に於ける性慾學の權威であつたから、性慾方面から小天地論を唱へて曰く、天地の間には雲が生ずるだらう、そこで人間と云ふ小天地に生ずる雲は性慾だ。心中の空虚に男女の慾が生じて、人生がうるほひ子孫が生育する状態と、清明の天に雲氣生じ雨を施して草木茂る状態とは同じだ。天地は春夏に雨多く、人間は少壯の時に欲が盛んに起り、老衰の日に薄くなること、秋冬に晴日の多きが如きである。然るときは老いて益々精力旺盛な男女は、冬日に於て雲氣空を庵ひ矢たらに兩雪を降らす北國地方に該當するわけだ。然し雀庵の人間小天地論に至つては更に一段の發展を爲し、地は陰にして女であるが、男は女の胎から生れるやうに、女たる地からぬつと高く突起した山嶽は男であつて、地から窪んで水を湛えた海は女だ。之れを以て父の恩は山に譬へ、母の慈みを海に喩へるのだとこぢつけ、山嶽を女性としてシイと呼んでゐる西洋人には夢想することもできぬドクマを立てた後に、さて曰く、だから山には茸が生え、海には貝ができる。中にも松だけは男性の表象であり、貽貝は女性の表象であるは偶然ではない。海水干けば貝魚は

産せず、女子の月水とどまれば子を生まなくなるなどと、眞面目だか戲談だか方角のつかぬことを、いかにも道理らしく、自分でも感心したやうに書き立て居るから吹き出しなくなつて来る。一体雀庵はコヂツケの雄なるもので、其の隨筆には隨處に貽貝松茸の筆法を用ひさまゝくなことを説いて居る。一寸標本を示すならば、あまメ、野郎メ、狐メ、犬メなどのメは女の意で、男に對して貶しめた言葉だ。以上は名詞だが、動詞のうちにも包メ、疊メ。屈メ、挾メと命令するものも、我れより下の者を見下す場合の男尊女卑から來てゐる。シガミ面と云ふのは、シガメ面の轉訛、シカミ面はシコメ面のことでも矢張りムダにメを付つたムダメの略語だ。それはよいが夫婦をメウトと云ふのは飛んでもない間違である。メは女のこと、ウトは人のことであるから、メウトと云ふ言葉は女人のこと即ち夫を持つた女人のことだ。ナカウド、アキウド、カリウドなどを見てもウトは人のことたるは明かである。メウトは婦夫の略語で、ヲトコをウトと略したものだと思へたら零點たゾ。ほんとうは夫婦の男をヲウトと呼び、女をメウトと呼ぶべき

だ。ヲウトをヲットと云つてゐるやつは無學文盲だ。但し女房は亭主をツマと呼び、亭主は女房をツマと云ふことは差支無し、互ひにツマ／＼とやるときは、ツレマツハルので和合の状目出度いことだなどと、鹿爪らしく論じ立てゝ居る。ついでなれば雀庵の牽強メクト論の残滓をも書き足して置く。曰く、弟は乙人のことで、兄から見ると年齢が劣るから乙の人だ。弟は女弟即ち女の乙人のことで、ヲトト、イモトとやるはウを省略したのだ。舅姑のウトもまた同様だ。私はこんな事をいふ雀庵の隨筆を見ると、窪美翁を憶ひ出す。窪美翁は何時もこんな事を云つてゐた。能登は陸地がノット出張つて居るからで、尻の出張つたのをノット尻と云ふのと同じだなどと翁は言つてゐた。つまらんと云へば云ふものゝ、斯うした暢氣な議論ならば、罪がなくて暑さ凌ぎには持つて來いである。

美術の論議

閑中に閑なくして却つて忙中に閑があるものだ。それは格別偉い人でなくては能きない藝當でも何でもない。私はいつでも家を出るときに不必要な本を一二冊携へて出て、仕事のひま／＼に、ちよい／＼と夫れを覗いてみる。たとへば煙草のみが煙草を喫うやうなわけだ。今日持つて來たのは、明治二十四年中の「しがらみ草紙」だ。其頃は祿々文學の判りもせぬ／＼に、そんなものを講讀してゐたのである。主筆森鷗外漁史が、この雜誌に據つて當時の文學的作品や論文を糞味噌に扱きをろし、八方に應酬するのを面白く思ふた。それはさうと明治二十四年ごろの雜誌は一冊四五錢から高いので十錢ぐらゐが普通であつた。しがらみ草紙は金七錢なりで、社告に斯う書いてある「この草紙は月刊にて、その價は前金一冊七錢なり。半年に積りて四十一錢、一年にて八十一錢、府外の人には別に一冊ごとに郵税五厘を添へ玉ふべし」私はこの七錢を投するに、重大の犠牲を拂つたものであつた。一月號の卷頭は林太郎の署名で矢野文雄、九鬼隆一兩氏の美術論に對しての評論で、矢野氏の書論と云ふのは、書には模眞の愛があるけれども、そんな

心持で描くのは駄目だ。一步進んで奇態の愛に入る。之れは實物では觀られぬ絶勝なごを寫すのだ。更に進んで實際にないものを描く之れが旨味だ。それから又各部の實を集めて全体の虚を作るに至るのである。奇態と旨味とは意匠に屬すると云ふやうなことであつた。すると漁史は美術學校の生徒にでも聽かすなら之れでもよいか知らむが、美術家に説かれない幼稚なものだ。空想の働きて美術品はできぬと笑つた。九鬼氏の美術論は、美術家は何を描かうと、書法の必要に檢束される以外に絶對自由だと云ふと、將來の美術品は公衆の共有和樂に基くものであらねばならぬと云ふやうな主旨であつた。漁史は之れに對し異論なく一實なる需用を充たさした上で想の需要を充たさうとするは奢侈だ。故に美はいつも奢侈品だ。此奢侈品は昔は暴主の愛用に供せられたけれども、今後は民衆の愛用に供せなくてはならぬとの九鬼氏の意見は善い」と賛成した。明治二十四年頃から美術品は民衆のものだとの議論が現はれて居たにも拘はらず、其の實相變らず暴主のものとなつてゐる。石崎光瑤君が海外から歸つて、彼地のブルジョアは所有美術品を公衆に開放してゐるとして、大いに感心し、あれでなくてはいかんと云つてゐる。

(39)

然し箱入娘のやうな我國ブルジョア階級の美術品は、容易に藏の中から姿を出さぬ。なせ姿を出さぬか、茲で聊か意見が有るのだけれども、暑さの時分だから遠慮し置く。ところで四月號の紙上を見ると、文麟の門を出た内海吉堂氏が飛び出し、美術の本意は他人の爲にするのでは有りません、純粹美術は自己の精神を發瀉するばかりであります。人の娛樂の爲に描かうとするならば心既に本領を失つたものでありますと一本入れてゐる。之れに對して漁史は何か云つてゐるかなと、次號次々號と繰つて往けどもうんともすんとも云つて居なかつた。要するに美術家は其の製作を爲すに當りコレラ患者のやうに自己の精神を發瀉するのが眞どうであるとしても、ないとしても夫れは漁史や九鬼氏の意見と矛盾するところが無いわけだ。なせと云ふにそんな貴重な所謂眞症コレラではない純粹美術であればある程、いよ／＼權力者や金力者が觀賞を私すべきでなく、民衆と共にせねばならぬわけなのだ。

吾亡妻の争

明治文學界の評論史に特記せられる筈のものは沒理想論の喧嘩である。沒理想は明治二十五年の早稻田文學に坪内逍遙氏が唱へたもので、沒理想一名沒却理想、又名不見理想又一に如是理想本來空、又一に平等理想、要するに理想にこだわらぬやうでなくてはいかぬと云ふのであつた。相手が坪内將軍と來てゐるから漁史も乗り氣で太刀打した。それから今一つ自評問題と云ふのが起つた。沒理想論は有名になり過ぎたから、ここには人の記憶に逸し勝の自評論の顛末を書く。その頃の文壇に宮崎三昧と云ふ小説家があつて妻を亡つた。先生仍つて「吾亡妻」の一文を書き、その後虚子と名乗つて自作の吾亡妻をば至情の文である、我文我涙を紅化したなど、味噌をあげた。之れに對し三昧攻撃をやつた多くの人々のうちに、文壇の名物正直正太夫もゐた。正太夫は三昧と云ふやつ怪しからん、名を匿くして世を詐はり、假面を被つて自分の文を至情の文だと云つたが、吾亡妻は偽物だらうと。然るに漁史は自文自評一向差支無しとの議論で、シルレルハウフが匿名自評したことを挙げ、シルレルの「群盜」に於けるハウフの「マリヤ堡最

後」に於ける例證を示したのが、正太夫ぐつと癪にさわり「シルレルとハウフと、名を匿くしておのが作を評せし例を引き、三昧道人を辯護するは、おさんが手探りにて勝手口の心張棒を取るにも劣れり。名しにおふ山房の主人が、神代は知らず今の社會には珍しく薄弱なる論を立てたるは怪しむべし」と皮肉つた。手探りにおさんの心張棒は、比喻が變挺古に過ぎて、手探りの半諒解を出でざるのが遺憾であるけれども、何でも鵲外漁史を淺薄だと云つたのには相違ない。その証據に漁史もかんにんならぬと做し、爲に費すに菊版十六頁二段ぎつしりの大論文を持ち出し、ごぼん／＼と咳ばかりして河鹿のやうに干からびた正太夫を叱つた。シルレル、ハウフの自評は忌味がなく、愚痴でなく手前味噌でもない。三昧道人の自評は以上兩大家の自評に比べて甚だしい差異なく眞摯熱誠である。引例は我輩の勝手にシルレルを引かうがハウフを引かうが、差支ない。凡そ類例と云ふのは相似た事柄を比べるのであつて、同一事を列ねるもんぢやないよ、分つたかと云つた風で、正太夫を見ること弟子の如く高く持してゐた。正太夫は又三昧の吾亡妻世上に毒を流した、此ごろ之れに似よりの自傳文が、無暗に現はれるのは亡妻

の罪だと云つた。すると漁史は「觸感のありのまゝを記すは悪き事にあらず、之れを記す巧拙は其の人に存す。拙き自傳多き故にルウソウ、ギョオオテ桶を作れりとは云ふべからず。吾亡妻を作りしを罪とすべくば、模倣者なしと云へども罪とすべし。吾亡妻を作りしを罪とすべからずは模倣者ありといへども罪とすべからず。かゝるが故に亡妻の作を犯罪なりと云つた正太夫の訴訟は、到底成立たぬ」と斷案を下した。その頃吾亡妻のやうな自傳的作品が尙ほ極めて文壇に珍らしかつたとは、之れを以ても知るべきである。それが今日は何うだ、右を見ても左を見ても吾亡妻ばかりであるのを、苔蒸す地下から正太夫が眺めたなら、呆れ返つて皮肉も出ないだらう。三昧、正太夫、鷗外皆共に今は世に亡き人であるけれども、しがらみ草紙の上には、當時の生き／＼した姿がまぎ／＼と遺つてゐる。

學海翁 蟲貞

しがらみ草紙は一旦廢刊し、其の後「めざまし草」の名で再興されたので、私は又再興初號からの愛讀者となつた。しがらみ時代には、鷗外漁史や、其の妹の小金井きみ子さんなどの、翻譯ものや作品が、盛んに現はれたけれども、めざまし時代には作品翻譯などの目ぼしいものは殆ど無くなり、主として各雑誌の小説批評に力を入れてゐた。滑稽なのは、自評論で前に鷗外漁史に叱かれた正直正太夫が、めざまし一號から之れに駈せ參じて「金剛杵」と題する作品批評欄に立て籠り、皮肉の珍言奇語を飛ばし、大文學者は天麩羅屋の屋臺の下に轉がつて居る班ぢやないから、來い／＼と呼ばれて尾つて掉つて起上るものでない」と云つたり、今の批評家には蝦と車渠、赤貝とさる蚌との區別が立たぬと云つたり、今の批評家は新田の太郎作だと云つたり、豆板乃至飴ん棒の是非を議論することはできても羊羹カステーラの味は分らんと云つたり、勝手次第の怪煽をあげてゐたが、間もなく文壇作品批評は「三人冗語」の題で、匿名の三人が賞めたり貶したりし、それから「雲中語」と改め、匿名をやめて露伴、綠雨、學海、鷗外、篁村、紅葉、

思軒と七人が麗々しく名乗りをあげて合評を始めた。此七人のうち生き残つてゐる者は、露伴一人と思へば、雲中語は大した紀念物である。雲中語の初めに頭取の名で口上がある。従來の三人冗語は此度から評者を増加し雲中語と改めたところが、耳早い新聞は三人冗語が七人冗語になると云つたのは笑止しい。すると又或雑誌は評壇の七大通現はれたりとやつた。一体本誌の趣旨は漢の三傑去つて晋の七賢來ると云ふ程の自慢でもなく彌次郎兵衛喜多八と一つ長屋の佐次兵衛が四國廻りに出た留主に、七偏人を頼んだと云ふ洒落でもない。同志が寄つて茶を飲んで豆を咬んで小説を合評するのだ。貶なす者は天狗の高笑ひとでも云ふだらうと云つた調子のもので、一人が賞めると一人が貶す、ませつ返す、開き直つて議論をする、七人の面目躍如として、之れが毎號の中心記事として待たれた。私は七人の評者のうち依田學海老人を第一に最員であつた。學海翁は當世の小説は何うして下らぬものばかりなのだらうと愛想を盡かし、いろ／＼と小言をならべた「小説なりとて唯眼前の事を、思ふ儘に書ちらして、それでよいと云ふ事でもあるまじ。毎日の事でうるさい故か、出る人も／＼尻切とんぼとやらになつて仕舞つても構

はぬと云ふも分らぬ事なり。いづれ其人物に何とか始末があるべきわけなれば、其の邊まで記して置きたきものなり。然るに若いお方の御名文には跡やら先やら譯がわからず始末が一向記して無きが多し」その家榮え子孫多く、七十の壽命を保ちたりとなん目出たし／＼と結末を付けた昔の小説が壊亂状態に陥つたのを由々しき文界の大事としたかも知れぬ。わけの分らぬ濫作に對しては斯うあるのは有理で、私も大賛成であつた。それから又「近來の小説は、すべて極々下卑た事のみ多し。下宿屋の貧乏書生の境界とか間男する女房とか、又は阿婆摺れの女學生とか、何れも人間社會の棄たり者、見るも穢らしき者のみを出されたり。話家が能く云ふ、馬鹿とか頓馬とか云ふ者でなければ、お話の種になりませぬと云ふが如し。又小説なりとて何か目當があつて書くものであらうに、何でも今の世の中で一番厭な聴くも讀むも喉がむか／＼する者のみを材料とするに云ふは何うしたものか」と詰問を發し「女を戀慕して身上も學問も無茶苦茶にして仕舞ふ、之れが自然の道ぢやと云ふやうに見ゆる小説多し。之れ甚だ社會の大害であるまいか。小説は教科書でもないから其邊は構はぬと云ふかも知れぬが、士君子たる者が筆を

執るに、事も有らうに故さら社會に害のある者を選んで書く云ふは分らぬ話ぢやと思ふ」こんな調子であるから、藝術の分らぬ頑固爺のやうだが、どうして／＼此翁は立派な文學通で、眞面目なうちに正太夫とこのけの皮肉も云つた「秋の夕暮」と題する櫻痴居士の新作、今の青年作家の一寸及ばぬ書きぶりだと賞められたものに對し「成程ね、あれが文章家と云ふのかね。景に逢ひて情を舒べ情に觸れ事を叙すと云ふのを世話に碎いて見ると用便が足りると云ふ事かね。昔公儀への諸願届などはあの調子に限つたものだよ」櫻痴の鼻をへし折るに十分であつた。

學海翁の面目

當時廣津柳浪が賣り出してゐたもので、中にも「河内屋」は「今戸心中」と共に傑作だと云つて大變な評判を取つた。河内屋の筋は頭取の口から言はせると「互に慕ひ合へるお染、清二郎、自己が妻たるべき筈の女の死したるより強て其の妹のお染を娶りたる清

二郎が兄の重吉、妻が冷淡なるに懊惱せる餘り、重吉が妾として家に入れたるお弓、お染、清二郎が情を知りて之れを憐れむ意ある婢お花、同じく婢にして錢呉るゝ方に靡くお吉、以上の人々をもて河内屋は成れるが、お染を安からしめんとする清二郎の念は、曾て清二郎に通せんとして斥けられ、河内屋に入りたる後又説きて又斥けられたるに瞋りを爲せる淫婦お弓が端睨し難き舉動の爲に誤られて、意に思はずして兄を氣絶せしめお弓を傷つけ、二人を死せしめたりと信じお染と共に死するに至る」のだ。之れに對し學海翁大目玉を食はし、筋の不合理不自然を指摘した後「この河内屋の大騒ぎが何が元か」と云ふに、お染と云ふ婦人が我儘氣隨から、親の命に隨ふやうに見せかけて重吉に嫁し、妻で居ながら妻たる道を盡さず、始終不平の體を示して夫にやけを起させ、どうぞう夫が奸婦を引入れると云ふ事を仕出したのが話の種である。さすれば此のお染は殺しても殺しても飽き足らぬ惡婦ではあるまいか。しかるを讀みもて行けば自然に其の不幸の境遇を憐れむ心が起るやうに書きしは好からぬ事と思はる。美術と道德とは伴はぬものぢや、道德臭い小説は面白く無いと云ふて何でもかんでも兄を殺すとか、夫を斬ると

か女房を害するとか、一生不幸で暮すとか、人間世界の疵ものでなければ小説でないとか云ふはどう云ふ筋から割出したものやら、美術は道徳に伴はぬと云ふて不道徳でなければ美術でないと云ふならば、醜術とした方が儼まるであらう」と奮慨した。すると差出が、御尤もでござる夫なら美術を善術としたらよいなどと冷評して居るのを事どもせず「小説家は悪行の教師、小説は悪行の教科書と云ふてもよろしからん」と云つた調子であつた。風葉の「寝白粉」も亦新平民を人に嫌はせやうとする作であるとして叱り付け、なせ新平民も華族も同様だと云ふやうな趣向で小説を書かぬかとやられたのは尤もだ。尙又露伴の弟子無涯と云ふ人の「苧萱物語」に残忍の點があるを咎め「筆の先でこしらへた人物にしる善人を生み出して夫れを散々に虐めちらし揚句の果に之れを殺すは實に氣の毒には思はぬか。此やうな惨毒な心を生ずれば自然と實事にも及ばすもので無いとは云へぬ。無垢潔白の女子が残忍無頼の人物に強姦せられ、刺へ其の男に殺された事を書いてあつたのを讀んだときは終日頭を悩まし心よく思はなんだ」と嘆息した。近ごろ米國の文學界で、文藝作品は人心を喜ばす快適のものでなくてはならぬとの意見も出てゐる

位で、似而非悲劇と夏の泥溝とは頭痛悪感のたねだ。翁の説は動かぬ。最後の景物として小説家の戀愛至上主義に對する翁の罵倒ぶりをお目にかける「この頃の名小説と云ふもの、どれもく道楽不埒千萬の書生と面の皮の厚き令嬢とのみで、所謂戀愛とか神聖の愛とか云ふもの、つまる所は獸慾とやらに相違は無いでござる……皆々様が大そうに賞めらるゝ今戸心中と云ふ小説の平田とか云ふ男も、女に打込む錢は皆親をだまして得たのでは無いか。又それに打込む女郎も女郎だ。錢金は申すに及ばす命までやると云ふ何とも得知れぬ大馬鹿者、大不埒者でないか。その馬鹿もの不埒者が總て此頃の大立者、文學者と云ふものはなせ如此下車で下車で下車ぬかねはならぬものか。何とかもうちつと高尚な人物を書いたら好きやうなものぢや」心中文學者の有島が冥界で此の學海翁に面會すれば、翁はきつと此の調子で大馬鹿ものだの不埒者だのとやつ付けるだらうが、有島主義の勃興した現代の思想を聽いて、さても驚いた成行でござると云ふに相違ない。

史海と孝謙

私の子供時代には田口卯吉氏が史學界の花と咲き、其の機關雜誌「史海」を中心にしての話題が持上つた。久米邦武氏が「神道は祭天の古俗」だと唱へて物議が矢かましくなり、大學に居られぬやうになつたのも、久米氏の論文が史海に出た爲である。人類學會に起つた坪井正五郎氏のコロボツクル論に對する論議のアライへこなつたのも史海である。然し田口氏自身の史傳論に物言ひのついたは孝謙天皇辯護であつた。私は今朝二階の物置で見付け出した「史海」第一號からの合冊の塵を拂つて新聞社へ抱へ込み、昔懐しい孝謙論に對した。田口氏おもへらく、後世史家が天皇の御傳を惡評するのは淫行の點で「前に惠美押勝を寵し、後に僧道鏡を寵し、道鏡異昧を進の疾を得て起たす」とあるのを本とし、いろいろに夫れを布衍するのだが、女帝は實にお氣の毒なものにて籠中の鳥のやうだ。併も權臣を信用し法師を尊崇し給へば兎角の想像を加へて之れを見るから堪まらぬ。唐の則天武が美少年を愛したことは正史に載つて居るけれども、孝謙を之れと同視するは以ての外であつて、當時仲麿は五十餘歳、道鏡も高齡であつたと思

はれる。年齢から推しても左様に浮いた話は無かつたに相違ない。道鏡が周圍から排斥せられた理由は、人心既に久しく政治宗教の混同を嫌ひ、道鏡のやうな一法師が政治上に立ち、宮禁に出入し、佛堂を建て、諸佛を供養する經費の負擔を命せられるのが氣に入らなかつたのだと。すると久米邦武氏はかんらくと打笑ひ、田口は道鏡を買被つた一体あいつは腥さ坊主だよ。尤も天位を危うくするとか、非望を抱くとか仰山に論ずるほどの奴ではないけれども、俗縁に取籠られ、徒弟に煽動せられて法王の位を受け得意のあまり、良繼百川らを尻に敷き、皇親第一の元老曰壁王(光仁帝)と弟の淨人とを肩を並べさせて大納言にのぼせ、永手らに己れを賀拜させたなどは自惚の極度であつた。だから藤原氏一門に道鏡排斥の空氣が高まり、忽然として筑紫の神託が來たのであつて、神託は道鏡排斥の秘計だと喝破したものと、孝謙天皇との關係については多く説くところはなかつた。然し田口氏が之れを聴き咎め、ぐどぐど言ひ返へすに及んで、そんなにして道鏡を持上げられるのは艶聞を打消さうとするのだらうが、一體男が女から寵せられると云へば誰でもオツに氣を回すものだ。それを辯ずると愈疑を増す。だから此事は

かりは艶聞が立つたからとて信せられもせぬと共に、存外の事もあるものだ。弄花事件さへも現行を差押へねば物にならず、藝妓の淫賣は猶更だ。ましてや素人の内行と來ては、妬心深い男が妻の寢所の床の下に匿れて、とんだ兇暴を働くこともあるので、諺に密夫は重ね斬りといふ位、實證なくては致し方はない。道鏡の艶聞だつて同様成程證據はないが、然しだ。社會問題として婦人と僧との交渉は利弊を究める必要はある。と一般論の方へ轉げ、解るやうな解らぬやうな味に絡らんだ筆を用ひた。尤も終りに於て仲磨、道鏡の兩人が宮掖に淫行のあつたと云ふことは、正史に少しも形跡は無いと斷定を下した點は、孝謙辯護論者の田口氏に取つて頗る有利の結果となつてゐる。

コロボツクル

コロボツクル問題と云ふのは斯うだ。北海道アイヌ土人の間に口碑がある。其口碑によると、アイヌ以前にコロボツクルと云ふ一種の土人が有つて、アイヌに逐はれ今は絶滅し

てしまつた。然しコロボツクルの穴居の跡は發見せられる。斯ういふことをアイヌ研究家として有名なバチラア氏も其著書に書いた。すると帝大の人類學教室から坪井正五郎學士(そのころは尙ビイ)が北海道を視察し、コロボツクルは確かに居つたに相違ないと信じ、之れを高唱したところから異論が起つた。異論者の代表はMBと名乗り、北海道各地から出る土器、石器、石斧などをコロボツクルのものであつたとするならば(一)コロボツクルは日本内地に蔓延してゐたとせねばならぬ、と云ふのは何處からでも同一の遺物が發掘せられるでないか(二)コロボツクルは日本人とも交通したとせねばならぬ、と云ふのは日本人種の使用した渦紋土器が遺跡に交雜してゐるでないか(三)それから又是等の器物を使用した者がコロボツクルであつたと云ふは、アイヌの言ふことを信するに他ならぬが、アイヌの言ふことなどは當てにならぬから、コロボツクルはつまりアイヌであらねばならぬ(四)アイヌの祖先は土器石器石斧類を製造せなかつたから、是等の遺物はコロボツクルの物だと説くを許さぬアイヌの祖先は是等の遺物を造ることができたであらう(五)アイヌの祖先は穴居せなかつたから、穴居の跡は皆コロボツクル

の住んだものと説くのも間違つてゐる。アイヌが穴居したことは實見者がある(六)要するにコロボツクルなど云ふ人種は居なかつたのだ。アイヌの口碑を輕信するは好くないこの立論堂々たるものであつた。此の大敵に對して坪井學士は馬鹿に丁寧な調子で、左様でござる。コロボツクルが内地にも住んだと申すことや、日本人の祖先とも交通したと申すことには私も異議はございません。けれどもアイヌとコロと同一物だとは申されません。又アイヌは穴に住んだとしても、コロボツクルの穴と同種だかどうか分らず、アイヌが穴居したとて、コロボツクルの有無に大した關係はございません。要するに、コロボツクルは實際居たものらしく思はれると申す迄で、證據立てる迄に至りませんと云つた風のものに過ぎなかつた。此の一わたりの問答のあとで神風山人と名乗るのが現はれ、コロボツクルが北海道に居たとしても、内地に居たか何うだか怪しいと云ひ出した。我國の歴史は蝦夷の強人であつたことを書いてゐるけれども、コロボツクルに就ては何も云つて居ない。コロが内地に蔓延したと云ふのは國史と違つてゐるとの議論であつた。すると坪井氏は之れにも應酬し「私は北海道にコロボツクルが居たとするに付て

少しも不都合を感せず。貝塚土器は同人種が作つたものと信ずるのですから、東京近在信越奥羽から出る貝塚土器及び重に是等の土器を出す貝塚は無論コロボツクルの手に成つたものと考へます。故にコロボツクル内地に住みしなるべしと申すのでござります」と出たものゝ「内地に住みしなるべし」では甚だ心細かつた。コロボツクルの語義についてMBはコロボは小と云ふ議でクルは人だから、つまり小人の意と做し。坪井學士はチャンバアレーンのメモアに依り、コロは路の義で路の下の人と云ふ意味だと説き。神風山人と名乗る人は、コロは持つ義、ボツクは窪みの義、グルは人の義でコロボツクルではないコロボツグルだと云つたが、坪井學士は之れを難じ、ボツクが窪みとは初耳でござる。尤もミルン氏は开塵に解釋したけれども、ミルン氏はバチエロー氏に隨ふたと云つて居られます。ところがバチエロー氏自身はそんな事は申されません。コロはコロニの略にて路の意、ボツクは下の義、クルは人にしてコロボツグルは路の下の人であります。コロボツクルと云つたのは間違ひで、眞實はコロボツグルでござる。又コロボを小の義となせるのは何處から出たのか初めて承りますと、アイヌ語の意味争ひも七

面倒なことであつた。

古い雑記帳

明治二十七年に日清戦争が初まつた。私は其の頃四國の或町に居て、東京新聞では國民新聞を取つてゐた。すると國木田獨歩が國民の從軍記者として軍艦千代田に乗込み、後有名になつたあの愛弟通信を書いたので、そんなものを喜んで讀んだものだ。獨歩は戦争から歸つて後も、豊後の佐伯に居たときの斷片的追懷などを書いた外に、田山花袋と云ふ世に匿れた若い文學者があると云ふことを、新聞で紹介した。私はそんな奴が居るかなど念頭にも留すに居たが、當時獨歩は兎も角も新聞記者として從軍通信や何かで名を出してゐたけれども、花袋などは何處に居るかほとんど分らぬ位の哀れな境遇の者で、勿論文學者としての位置さへ認められてゐなかつた。後から考へてみると、獨歩は其のころ田山花袋や宮崎湖處子などゝ知り合になり、花袋が文學者としての天分のあること

に注意したものらしい。湖處子は民友社の十二文豪にオルヅウオルヌを執筆したり、自傳文の「歸省」を書いたりして既に一廉の文士となり、國民新聞紙上にも時々隨筆か何かを出してゐたと思ふ。私の仕事には関が多かつたので、獨歩や湖處子の文章を時折雜記帳へ寫し取つて置いたものだ。其の雜記帳の十幾冊は近年まで保存してあつたけれども馬鹿らしくなつて其の後悉く知人へ分つた。最早残つては居ないだらうと思つてゐたのに、何かの中から一冊だけ現はれた。それを見ると獨歩は三十六灘外史の別號で「豊後の佐伯」を書き佐伯の柿のうまかつたことを思ひ出し、城山へ登つて懷中から柿を取出し食ひながら見渡すと、藤原村の平野の彼方に番匠川が流れ、川岸に竹藪が茂り、佐伯惟治の城趾や、榎牟禮山や遙かに國境の山々が霞んで見える。數へると一秋に食つた柿は二人して三百位であつたと云つて居る。記者時代の獨歩は貧乏であつたらしく、花袋は無論、相當に名を賣つた湖處子すら矢張りさうであつた。九州へ歸省して筑後の舟小屋鑛泉へ胃病養生に出掛けた湖處子の「行脚記」をみると、竹皮包の握飯を携へて草鞋穿きで野道を行く途中の景物いろ／＼あつて、舟小屋の木賃宿へ入ると、村に豊年祭

の芝居ができるので、木賃の女房につれられ天満宮境内の野天小屋へ三錢の札代を拂つて面白がつて見物したあたりが、文字の上に活躍してゐる。獨歩の文章で單行本となつてゐるものには私の雜記帳に在るものは無いやうだし、中途に文壇から消え去つた湖處子のものなどは、今日「歸省」さへも滅多に手に入れ難い。況んやこんなにもすばらしい木賃宿日記と來ては、恐らくは記憶するものも莫からう。それも中々懐しいことであるが、それよりか斯うした文章を雜記帳へ寫し取るほど餘裕のあつた其時分の私の境遇は一層懐しい。私は唯日が長くてく／＼仕やうがなく、ごうかすると川の流れる林の中に寝ころんで二時間でも、三時間でもちつとして居たものだ。二時間も三時間も唯ちつとしてゐると云ふことは今の私に取つて夢のやうな話である。

川上正十郎 (一)

川上正十郎の書いた自傳の一部がある。それは「何か面白いものが有りませんか」と私

から要求したときに、正十郎が野紙に書いた物を取り出して見せたのを私が寫し取つて置いたのだ。正十郎とは今の貴族院議員川上親晴氏のことだ。正十郎は大隅國姫良郡加治木村に生れ、子供の折は村の私學校で學問をした。村の私學校を終はると、一村から四五名の秀才を選抜して鹿兒島城下の本校へ送ることになつてゐたので、正十郎は明治六年十八歳のとき鹿兒島の本校へ入つた。明治八年になると、私學校内部には不穩思想が漲ぎつて抗官的態度を現はし始め、正義論と西郷最員とが兩派に分れて議論を闘はした。恰もこの時正十郎の父が病氣であつた爲、正十郎は鹿兒島から加治木へ歸り父の介抱をしてゐると、村内の私學校でも議論が起つた。正十郎等は抗官的態度に反對して多數者と争ひ、其の是非の批判を本校に求めてやつた結果、本校へ出頭を促して來た。出て行けば迫害せられるは判り切つて居るので之れに應せないでゐると、縣廳の用事と稱して召喚した。そこで鹿兒島へ出て行くと、先輩篠原國幹、邊見十郎太や別府新介、松永などが議論をして正十郎等を壓伏せんとした。その時は一旦歸村し固く退校の決心をしてゐた。私學校の魁首とも云ふべき柚木、水間、松葉などは、正十郎一派の正義論が

癢に觸つたと見え、日當山の温泉で湯治中の西郷翁の許へ行き、何か説く所があつたらしく、翁は學校へ歸つて来て、親しく兩派の意見を聴くと云ふ事になり、明治八年十一月一日學校内で討論を始めた。西郷翁も言葉を出したので、正十郎は翁に喰つて掛り激論の後、同志二十三名と共に其の日限り私學校を退いたけれども、私學校の勢力は隆々として明治九年二三月ごろになると、十四五歳以上五十歳以下の男子は、悉く同校に籍を置くやうになり、反對派の正十郎等は僅二十三四名しかなかつた。之れちあ郷里に居ても面白くない上京するがよいと、伊丹親恒、前田素志、市來悌輔等は皆東京へ出てしまつた。正十郎と木佐貫とは何れも家庭の事情で上京の望みを果すことができず、ぐずぐずしてゐるうちに熊本で神風連の爆發があり、山口で前原黨の叛逆があつて形勢いよ／＼不穏となり、鹿兒島の私學校では銃器を購入し彈藥を製造し、軍隊操練を始め、翌十年一月三十日の夜、草牟田、並磯の彈藥庫を襲ふて彈藥銃器を掠奪したこの急報が加治木村に達した。私學校黨は時機到れりと壯士二百名二月一日の夜城下に赴いて彈藥を掠奪し、之れを村へ運搬して来るやうな騒ぎで、正義派たる正十郎等の少數者は身邊大

いに危険を感じたから、高橋爲清、伊丹、前田等と共に、三日の晩に村を遁れ急を熊本に報ずることに定め、二日の夜は正十郎宅で離別會を開き、夫れを終ると木佐貫方へ告別に出掛けると、木佐貫も同行すると云ふから、一行五人は三日の拂曉村を出た。そのときの正十郎の和歌

賤か身は時雨と共に降りすてゝ名をや流さん谷川の水

時雨と共に降りすてゝ、名をや流さんなどは嫌やな歌で私は感心せぬ。但しこんな時に和歌とか漢詩とかをやつて置くのが壯士の常であつたらしい。歌は感心せぬけれども衆論と相容れぬ青年等が爽昧に乗じて危険境を脱する景情は詩にも小説にもなる。

川上正十郎

(二)

正十郎と木佐貫とは午前十時過ぎに横川町に着き、路傍の飯店で午餐を喫したが九州であつても季節が季節であるから雪交りの雨が降りしきり、十一時頃になつても降り歇

むやうすはないので、馬を備ふて雨雪のなかの道を急ぐほどに、薄暮に及んで漸く眞幸吉田の所定の宿屋に入つた。先發の同志四人はこゝに待受けてゐる。互ひに勞を慰め合ひ、さて今から直に夜行して人吉に出るか、それとも今夜は一泊するかとの問題を議した結果、當地の状況は靜穩のやうであるから、今夜は旅行の疲勞をやすめ、明早朝發足しても好からうと云ことになり、晩食を終り風呂に入り一同寢につくや否や前後も知らず熟睡してしまつた。然るに午後八時頃突然室内へ闖入する者があるので、一同驚いて起き上るところを、四方から棍棒を持つて脚腰の起たぬほど打ち据え、正十郎等の一行を高手小手に捕縛し、別室へ引擦つてゆく。そこには警部の鎌田と巡査數十人と、私學校の暴徒が幾ら居たか押合ひ轟合ひ詰かけて居た。正十郎等は全く私學校黨の術中に陥つたことを知り、無念の齒を喰ひしばるとき、警部は佩劍をがちや付かせて威嚴を示し、汝等を捕縛したのは國事上の嫌疑の爲で、縣廳の命令である。之より直に鹿島に護送致すから左様心得てよろしからうと言つた。國事上の嫌疑者の口から、國事上の嫌疑とは何かしなものだが、縛られてしまつたうへは、左様心得る他に仕方なく、警部のあとから

わい／＼言つてゐる、彌次馬の私學校連に、犬の畜生のと勝手次第に罵言せられ。暗の野道を追ひ立てられて「をい伊丹」と正十郎は呼びかけた「何んだ正十郎」「オイドン正氣歌を記憶しちよるか」「うん」「一つやらう」「よか／＼」で兩人聲を揃え文天祥の正氣歌を高らかに唄うた。すると巡査の一人で米良尙一と云ふのが、罪人のくせに太い奴らだと手に持つてゐた炬松で正十郎の顔をいやと云ふほど撲つた。相手は縛られてゐるから、炬松で撲らうと棍棒で打たうとこんな安心なものはない。私學校の彌次連中も面白半分に寄つてたかつて打ちのめし、正十郎を溝の中へ蹴込んでしまつた。かゝる場合に警部の役目は、大切な罪人を保護せなければならぬとあつて、暴徒を制したから、正十郎は瘦我慢の有りだけを發揮し、平氣で溝から上つて歩き出した。翌くる五日の午前三時に横川町に入ると、こゝにも七八十人の暴徒が待受け、國事上の嫌疑者を見物した。暫時休憩、五時に横川を立出る。此日は前日に引替へ雨は霽れ上つたけれども、道は泥濘で歩行が捗ざらぬ。八時ごろ漸く溝邊郷の石原と云ふところへついて休憩した。此とき國事上の嫌疑者で繩にかゝつたもの共が續々としてやつて來たので、見物人が幾千人

ともなく出て来てとんだ盛況を呈したものだ。正午十二時頃加治木村の第四分署に到着し、正十郎等を柱に繋いで、警察の門をわざと開け放ち、通行者の観覧に供したのは、警察官として大いに民衆の満足を計つてやつたのかも知れぬ。正十郎自筆の記録に曰く「予輩素より私犯に罹るに非ず、廉恥を破りたるにあらず、時運の不可に際會し、大義を正し名分を明かにし、爲に斯の困難に陥りしは古今稀有の事にして、大人君子と雖も免る能はず、況んや予輩に於てをや、仰いで天に愧ぢず、伏して地に慚なきこと、識者を待たずして昭々たり。予輩は却て之れを榮とする所なり」後年の警視總監もこの時は巡査や警部のわからんのに業を煮やしたことであつたであらう。

川上正十郎

(三)

五日の午後二時頃、正十郎等の同志は加治木から鹿兒島へ護送せられ、廣小路第一分署の柱に猿のやうに繋がれたが、分署内はまるで戦時状態を呈し、警部、巡査、私學校生

徒何れも皆刀を帯び銃を携へ草鞋を穿き、出入頻繁を極めて居た。尤も分署内に縛られて居るものは正十郎等の同志ばかりでなく、他に尙數十人が珠數繋ぎにせられ、それらが片端から別室へ引づり出され糺問を受けて居る。糺問は轟々と毆打するのであるから其の物凄いい響きが手に取るやうに聞える。正十郎等のうちでは第一に伊丹が引出され、前田木佐貫のあとで正十郎の番が来た。出てみると審問廷の板の間は拷問迫害の鮮血が淋漓として流れ屠牛場か何ぞのやうであつた。正面には警部中山甚五兵衛、柴善次郎が並んで椅子にかゝり、其の左右には私學校の暴徒が五六人、手にく棍棒を握つて控えて居る。この時警部は聲を勵まし、汝今般東京から歸つて来た伊丹、前田などの徒と密謀を企てたこと残らず判明した、聊かも包まず其の次第を申し立てたがよいと云つた。残らず判明した以上は拷問にかけて尋ねずともよかりさうなものだ。正十郎答へて生と彼等とは以前からの友人であるから往來談話するは當然である、密謀などは意外千萬近頃私學校の舉動が不穩である爲、熊本山口の覆轍を踏んではならぬと思ひ、互ひに大義名分を誤らぬやうに議論した迄である、其の他は何事も知らぬといふ。警部兩人は、

眼を瞋らせ聲を荒らげ、やあ／＼言はせて置けば舌長し、大膽至極の奴だと願でしやくると、私學校の壯士は、例の根棒を振つて正十郎を打つて打つて打ちのめし、もう大てい弱つたところを見計らひ又審問を始める。汝今回何の用事に依つて上京せんとしたか。答へていふ、去年十一月上京の許可を得て後家事の爲に時日を遷延したところ、歸省中の友人が歸京すると云ふから、同行せんとしたに過ぎぬ。警部いふ、そんな事は何うでもよい、彼等と語つた機密を白状するのだと、そこで又根棒を加へ、引張り出して柱に繋いだが、根棒の打疵が非常に痛み出し苦しみながら天明に達した。六日は一日柱に繋いだ儘糺問なく、晩の九時ころ雨中を引つ張り出して縣廳の第四課へつれて往つた。そこには既に數十人の同志が繋がれて居て、柴警部は前日のやうに糺問を始め、汝等屢谷山郷に通牒して離間策を講じ、變事あるときは、私學校を襲撃する陰謀を企てたであらうと。今度は陰謀者から陰謀呼ばはりをして責められた。夜十二時頃二十六七名が珠數繋ぎにせられて獄舎に投せられ、正十郎は第四番獄に入れられた。獄内は眞暗で誰々と同舎してゐる分らなかつたけれども、夜が明けてみると、寺原長輝、安樂兼道、大山綱

介、土持高、柏田盛文、永野祐道、古垣兼成、竹下種成、酒匂龍五郎、萩原壯左衛門の外に眞宗の僧侶が大分居た。この時は最早賊軍出兵の最中として、其の騒ぎは大變なものであつた。それよりか二月初旬の寒さはがた／＼ふるふばかりで、一日も早く潔く死にたいと念じてゐると、二十六日に及んで新築の假檻倉に移された。此日は舊曆正月十四日で市街は賑ふてゐる。三月六日まで正十郎等は何うくらしただか記録になく、六日に正十郎又和歌を一つ

世の人はいかにいふらむ我魂は清き蓮の花にぞありける

之れも私のいやな和歌だ。然し蓮の花のやうな魂ひは一寸珍しい、正十郎の魂は變な恰好をしてゐると見える。同八日勅使着艦の風説が傳はり、十日朝一隊の兵士が侵入して來て牢獄を開いて救ひ出してくれた、それは官軍の兵隊であつた。

私の借家史

(一)

明治二十九年には富山に前代未聞の洪水があつて、三十二年には之れまた未曾有の大火災があつた。随つて借家大拂底の折柄、私は富山へやつて来てごうにか借家を求めた。その世話して下さつたGさんは聊か氣の毒さうに「何分家が無いのですからな、家賃は少し高いやうだけれども仕方が無い」と申しわけのやうに言はれた。それは物静かな下町の宮の向ふ側にある、前がりの極めて不體裁な古い簀むしこの筈まつた家で、屋根は此邊一帯の家々と同じい石置の板葺であつた。それも全家を借りたのではなくて同居である。眞の家主は誰であつたか、今に不明のまゝに過ぎ來つて居るが、其の家を借りて住まつて居るのは以前土木吏であつて當時遊んで暮す松川十造と云ふ人で、十造君が更に私へ切り貸しをしてくれたわけである。十造君の居る部分は、入口の小さな土間から階段を一つ上ると三疊間があつて、此の三疊の横手の襖を開けると、通りに向つて簀むしこを入れた六疊の居間が一つ、三疊の正面の障子を開けると、そこに又押入れのついた六疊がある。此の兩室に主人夫婦と二人の娘が生活してゐるのであつた。さて十造

君が私に提供した部分は八疊二室で、二室共に床と押入れが付き、一室は前通りに向き他の一室は後の庭、庭とは名ばかりの狭い地面に對つてゐる。前なる八疊の前に三尺の土縁がついてゐて雨戸がたつ、雨戸の前に猫の額みたいな庭があつて、往來との仕切り古い板塀をたて、その板塀の三尺の開きから同居人たる私と私の家族は出入することになつてゐた。方位は前座敷が西、奥の座敷が東だ。それで家賃は月三圓五十錢、疊一枚が二十一錢八厘何毛、四捨五入で二十一錢九厘、もつと大まかに見て二十二錢に當る。「そりあ君不法だ、大いにボルぢやないか」と私のために奮慨してくれた者さへあつたのだから、今日からみると滑稽なくらゐである。台所と便所とは十造君方と共同使用であつたが、便所と井戸とは其の境を接して一尺の間隔さへも覺束なく、井戸水の中へ尻尾のついた蛆がうよ／＼浮くことも珍しくはなかつた。十造君は一体全家を幾らで借り受けてゐたのか、そこは秘密で分らなかつたけれども、四圓若くは四圓五十錢と云ふ想像が、中らずと雖も遠からずであつた。さうすると十造君は、私に對して家主の權威を有しながら、自身は五十錢乃至一圓の家賃を負担すれば濟むわけで、おまけに宵に米を磨

いで釜に入れて置くと、必らず半分が減じてゐる。更に量を増してみても、それが又半分になつたほどに、十造君は私等の榮養素を奪取したのだが、私の奔走で十造君がお役人の地位を恢復して後は、此の怪事も跡を絶つたかはりに、土木請負師のやうな男が盛んに包んだ物を持つて来て、其の缺を補つたやうであつた。そのころ私は「葡萄棚下」と題した日記を書いたが、それは前庭の破れ板塀の上へついで實の成つたことのない葡萄蔓が匍ひあがつてゐたからだ。その八疊の前座敷へは、松の屋みどりの小林翠君だの今は故人となつた天涯茫々生の横山源之助君だのが遊びに來た。要するに私の越中に於ける生活は三圓五十錢の家賃を以て始まつたのである。

私の借家史

(二)

十造君方に同居すること約九ヶ月、十造君がまだ盛に土木界に活躍して吏運めでたい折柄、丁度その家の向ふ側に稍上等の間貸が出たので、私は其の年の十月二日向ふの家へ

引移つた。すると間もなく十造君は元の浪々の身となり、十二月下旬に夜逃げをしてしまつた。私の新借宅には古いけれども門があつて、其の門は衝木門ではなく、板の屋根を葺いたものであつた。家主は老人夫婦で、其の姓名は中山延恒、年齢は六十五六見當鼻の下には、白い八字髭が威厳を見せてゐた。何でも以前は長らく官吏をしてゐて、退官後ごごどの町長に擧げられたこともあり、恩給でゆるりと暮らして居なさるのだとの近邊での風評であつた。老夫人は出て居つた人だと云ふから、何所へ出てゐなかつたのですかと問ひ返して他に笑はれた。その出て居つた夫人は、いつも長火鉢の前に坐り、長い羅苧の煙管に刻み煙草を詰め、紫の煙をぶつと輪に吹き悠々閑々としたもので、老主人公の不在には、ちやらん／＼と錢勘定に餘念なく、そんな折に下等の身なりをした怪しい老婆が来てひそ／＼話をやつてゐた。多分それは出て居つた夫人の臍線を利用する營業の仲介機關であつて、其の利殖事業と老主人とは全然没交渉なのであらうとの内部消息は自然に私等の耳に傳はつた。此家は十造屋形よりは規模も相當に大きく、私の間借りした部分は、東の前庭に向つた八疊の居間と、西の後庭に臨んだ床付八疊の座

敷と、三疊の附屬室とで、居間の前には二尺幅の竹縁がつき、座敷の前には三尺の板縁と土縁とがあつた。私は三疊に机を据えたものだが、そこにイチヤケな床が付いてゐるのは嬉しかつた。家賃は同じ三圓五十錢でこちらの方が十造屋形よりは遙かに割がよいと云ふのは第一庭が廣くて、前庭には立派な羅漢柏を中心に樹木の植込が多く、後庭は約百五十坪もあらうかと思はれる位で、三四十尺の高さの老松が五六本もある上に、竹林がある柿がある、李がある、桃がある、木蘭がある、李の巨木の花ざかりは實に好かつた。それに中山老人は好々爺であつて、自分の手入れをした盆栽を取り替へくゞ黙つて縁側に並べて往くやうな床しい親切を見せて呉れた。然し井戸水は富山の言葉でいふアカソフで、砂漉しの砂利桶を潜らせねばならぬ悪水で、雨の降るとき外井戸の水を濡れながら漉し取るのは相當の手敷であつた。その家に居住した折、十造君が夜逃げをするに付、張物板だの皿鉢類を買取つて呉れぬかと、彼之れ夜の一時頃に十造君の女房ごのに頼みこまれ、餘儀なく承知し、かたんことんと女房殿が搬んで来るのを受取つた。そしてその翌くる一番で同一家が遠い所へ立去つたあとで、藻抜けの殻の十造屋形は多

敷の人々が入り込んで、しばらくは呆れたやうな怒つたやうな聲で罵り騒ぐのが已まなかつた。私はその頃十造君の一家に對する觀察を書いてみたら面白いものができやうと考へながら、今日に至るまで終に其の目的を果すことができぬ。

私の借家史

(三)

中山方には、別に小さな入口があつて、そこから入ると又小さな室が三つある。それには私以外の間借人が住んでゐたものだ。その人は以前京都の公卿の家に奉公をして居たことがあつて、明治初年兵隊の一人となり、錦旗に従ふて八甲田山の雪を越え半死半生の目に遇つたこともあるさうだ。この談は丁度その折八甲田山で雪中強行軍の凍死事件が起り、凍死兵士の幽霊が現はれるなどと傳へられた爲、右の鐵道役人ごのは、一つ屋根の下に暮す私に對つて古い昔を追懐して語り聽かせたのである。それから推しても實瓜と云ふ人は最早相當の老人でなければならぬが、夫人は京都言葉の三十五六歳の膨れ

づらの女で、夫婦の間に十四歳の娘が居た。停車場はまだ櫻谷村に在つたころの事とて老驛員蔓實瓜君は、毎朝一定時間に長い神通橋を渡り、廣い馳越河原を横切つて驛通ひをしてゐた。實瓜君の職務は列車に乗つて金庫を金澤まで保護して往くだけの、比較的骨の折れない役目であつた。毎朝神通川を渡るときに、帳場の人力車夫等が「いつもの旦那が往くからもう何時だ」などと、實瓜君を時計の代用にして居たさうだ。蔓の一家は不思議に何事をもせない人々の集まりで、黙つて夕飯を終り、いつ迄もノノ親子三人が黙りこくつて、爐ぶちに座つて十時を打つと寝る。しかも冬であつても炬燵などは絶對にせない。こんな奇妙な生活の上に豫期せぬ變化が生じた。一体實瓜君の背後には更に太い上役人の強蔓があつて、鐵道界に幾度人員淘汰を行つても、この代用時計翁だけはびくともせない。當人も頗るそれを得意としてゐたにも拘はらず、不意打に首になつてしまつた。さあ大變だ。かゝる折には直に東京に在る強蔓へ相談に往きたいけれども旅費の用意がないと云ふので、そこは一つ屋根の下に住む私が取替へ融通することになつた。で結局東京へ引あげるべしとの注意を受けて引返し、匆匆家を片づけ其の折も不用の

家具什器の若干を私に拂ひ下げること十造君同様であつた。かくて私の身邊には僅かの時日に人事の二つの變化が起つたばかりでなく、今日は人の上であつたものは、明日は我が身の上の廻り番に當り、故郷の父が同棲するやうになつて、同棲と共に病氣になり便所通ひが困るところから、室を入れ替へ實瓜君のゐた跡を襲ふた。之れは入口から上りたての三疊、其の横に三疊、奥に六疊、あとにまだ六疊二室合せて二十四枚敷いて家賃は同じ三圓五十錢、但し室は何れも粗末で、唯六疊の一つは鍵の手に二尺幅の廻り縁が付いて庭に面し。之れだけが少しく居られブルになつてゐたぐらゐなものだ。この家に於て私は父を喪なつたので、中山方の一年あまりの生活は、借家史中の主なページを占める。

私の借家史

(四)

中山方で初めに借り受けた座敷も居間も、通氣のよい上に明るい快濶な住居であつたけ

れども、後の病氣の父が便所の近いところを望んだ爲、已むを得ず場所替をしたのであつたから、父の居なくなつた後は辛抱せねばならぬ必要もないと云ふので、借家を捜してみると、其ころは大火災で焼けた家々も、あらかた再築を終つて、住宅難の聲の収まつた折柄であつたのと、必ずしも全家でなくてもよい、切り貸尙更便利、要するにどんなところでも構はぬと云ふ方針であつたから、手頃な借家は幾らでも見付かつたなかに、同じK町の奥の方に或小學校教員の所有にかゝる相當大きな家が明いてゐて、其家は角家であるところから、内部を程よく仕切り、廣い部分は廣い通りの正門から出入させ、狭い部分は入口を横町につけ、そこにも小さい門を付けて、どちらでも貸すと云ふことであつたから、小さな方を月四圓で借受け三十四年の六月二十九日に引越した。大きな方は各室共頗る陰氣であつたけれども、小さな方には稍明るい室がついてゐた。室數は前庭に面した南向きの六疊、中間八疊、北の後園に向いた四疊半、四半と上りたて三疊との間にある押入づきの小間で、前の六疊と、四疊半とには床がついてゐた。さて此家へ住居をしてみると、何ういふものか落付きがわるい。それが何の爲であるか解

することはできぬけれども、中間の八疊には天井を張つてないので、襖を隔てた彼方らが廣い方の借家人の居るところである爲かも知れぬ。殊に南向きの座敷と來ては左程暗いこともないのに、晝の中から小凄いやうな不安な心持になるのが不思議であつた。そこで私は主として四疊半の北向きの室を書齋兼居間としてそれと其次の小さな室とで暮らすのであつた。この二つの室は後から継ぎ足して建てたもので、天井の低い茶室めいたものにできてゐたが、二つの室の堺にある鴨居が低く下つてゐる爲め、清源寺から父の忌日毎に讀經に來る兵隊あがりの、丈の高い體格のよい長老の頭を打ち付けたことは二度や三度でなかつた。その頃井上政寛さんが執達吏をやつて居た時分のことで、或時家のはなしをすると、政寛さんの云ふには、あの家ならば一度自分が買取つて住居したことがある。あれ君化もの屋敷だ。いろ／＼凶事が打つとく上に、何となく陰氣で氣味のわるいうちであつたものだから、直ぐ賣拂つてしまつたのだと、眞顔になつて言つて聽かせた。之れにすつかり脅かされて、一年ばかり漸つと辛抱したあとで、附近に在る政寛さんの家へ避難した。然しそれは私の都合と云はんよりは、家主の教員ごのが

新任視學官ごのへ、其の持家の全家を提供するに付、私へ退去を命じたのであつた。それはよいが其の家へ新任新山視學官が居住すると、大變な凶事が勃發した。と云ふのは主人の母なる老婆が庭の井戸で溺死したので、之れについてさま／＼の巷説が湧きあがり、その井戸からおばあ様の幽霊が現はれると云ふやうなことも傳はつた。當時私は視學官母堂の表面の病死が變死であることを知つて、保安課長の黒田懿十郎君に「どうだ」と云ふと、胴蓋墓のやうな課長は「そんな話だな」と肯定したにも拘らず、知事の李家隆介さんが書いてくれるなど事をわけて頼んだ。それならば事實變死でないと申されるのか、然らば堂々として戦へばよい。視學官の言動はかく／＼であるに徴し私は之れを事實と信ずると力きむと、知事は笑つて「新山はそんなに云つてゐるかね、問うに落ちずして語るに落ちると云ふ奴か、然し新聞に出されると監督者たる我輩が困るから」といろ／＼云ひ聽かせるのを、當時の私は何糞構うもんかと素つ破抜いてしまつたら、知事はむつとする、視學官は眞赤になり訴へてやると云ふので、部下の傍田君を伴につれて辯護士を歴訪し、果は金澤の相川辯護士方まで出掛けなければ、何うした事か夫

切りになつた。後で探ると何うやら李家知事さんが抑へて許さなかつたからだとも聽いた。それは私の借家史に附屬する因縁物語りの一くさりである。

私の借家史 (五)

明治三十五年七月、日は忘れたが多分下旬であつたらう、同じ玉町の井上政寛さんの家へ引越した。政寛さんはその頃總曲輪の郵便局裏手に執達吏役場を開いてゐて、オチニ賣藥の賣子の着てゐるやうな服装をして、全然役場の方に詰めて居られたから、本宅不用とあつて、それを貸家にしてあつた。家は棟の低い平家建で、之れを半分に仕切り、半分は既に師範の附屬小學校へ出る手工の教員さんが占領してゐた。私の借り受けた部分には、北向きの六疊が二つ、三疊の玄關の間の外に、居間と玄關の間の中に挟まつた廊下のやうな四疊敷があつた。併もどの室にも床などは付いてゐないのである。それで家賃は通り相場の三圓五十錢、井戸は春戸の隅つこに在つて、井戸から台所まで、狭い

家の腰を七八間ばかり水を汲んで持ち運ばねばならなかつた。所屬の地面は随分廣く、庭園の奥の數百坪は畑にしたり、植木屋へ貸して植木の置場にしたりしてあつた。然しそれらは私に交渉のないものであるから、垣の外に立つて「どんな植木があるかな」と覗いてみる位に過ぎなかつたけれども、私の借宅に附屬した門脇の五六坪は使つて差支ないとのことで、有澤村のアンマに里芋を作らせた。以前其の空地は政寛さんが養鶏をやつてゐたところであるから、鶏糞が澤山あつた「君、あそこへ畑をすれば肥料はいらんぞ」と政寛さんは私を喜ばせた。それ程結構な土地をつけて三圓五十錢とは安いものだと思はざるを得ないので、私は「さうですか」と嬉しさうな顔をして感謝したものと、有澤村の宗吉アンマは「矢つぱりションベ掛けにあいかん」と云つて、所謂ションベを盛んに撒いた。私は井上政寛さんが、精力主義の人であることを此時つく／＼實驗することができた。政寛さんは毎朝五時前に必ず總曲輪の事務所から裏の畑へやつて来て、作物の世話をして、私はまだ寝坊をしてゐる間に去つてしまはれるのであつた。今日の私ならば夫れくらゐの眞

似のできぬこともないが、何分睡いさかりの頃とて、感心しながらうつら／＼として起て出るのが憶劫に堪えなかつた。之れにも居ると約一年間、政寛さんが執達吏をやめて役人になる爲であつたか、又は家族の都合で本宅へ歸らなければならぬのであつたか、兎も角も家主側の事情で明け渡しを求められた。失禮ながら此の家は何方かと云へばガツサイなもので、殊に私の借りた半分には床一つなく、床があつても掛物一幅持たぬ身にと取つて夫れは無意味の贅物ではあつたけれども、建具なども頗る粗末でがたびしと動きのわるいこと夥しかつた。それにも拘らず微塵も陰氣臭い點はなく、住み心地の快満であつたのは不思議だ。

私の借家史 (六)

今度は政寛さんの本宅と背中合せになつてゐる個所に、手頃の借家を見付け出し、月四圓の約束で夫れへ引越した。裏町にはなれども町は同じK町で、番地は十八番地であつた

家主は一丁ばかり離れたところに住む請負師の大竹肌好老人と云つて、老人も其の妻女も病氣で床について居るのだが、借受けたいと云ふなら本人に来て呉れど話に付、私は其の病床を訪ねた。尤も私の方では豫て肌好老人を見知り居るけれども、先方では私なる者が、何處の馬の骨だか牛の胴骸だか正體不明に付、家賃を踏倒すやうな人相骨柄でないか何うかを試験する爲であらうと直覺した。すると當人根が正直律義此上なく、孝子六兵衛と六治古とが保証に立つてくれる程であるから、首尾よく信用鑑定に合格したはよいが、肌好老人も老夫人も其の病氣は肺病であると云とを後から傳へ聽いて一寸無氣味のやうでもあつた。他の造作の棚下しをするではないが、この肌好老人は瘦軀鶴の如くである上に、夥しい痘痕がある爲、まるで安い唐黍のやうな容貌風采であつた。さてこの十八番地に移つたのは卅六年十月のことで、私思ふには、斯う毎年の轉宅では家探しをするだけでも奔命に疲れるわけであるから、之れで當分動かぬことにしたい。殊に今度の家は例の棟割り式で、一棟を半分仕切つてあるとは云ふものゝ、室は六疊床づきで縁側と土縁のある座敷、四疊半の茶の間、二疊押入付の納戸、その奥につり床と

地袋のある四疊半の茶室めいたものがあつて、玄關にも四疊の餘地がある上に、庭は廣くて樹木も多いから、住み心地はわるくない。唯た恐れるところは家主肌好老人の身に若しもの事があつては、又追ひたてを食はぬものではない、何卒肌好老人の生命長かれ唐黍翁健在なれと心中大いに祈つた。但し何を目あてに祈つたかと云へば、その目あてはないので唯漠然と祈つたところ、果せる哉効果はない。先づ老夫人が没し、私の信用鑑定官であつた老人も亦死なれた。で老人の娘さんの家族が私の居る十八番地へ居住することとなり、まだ一年にも足らぬ翌年の夏又々退去を命せられた。肌好老人の娘さんは膠川技師と云ふのに嫁し、自身は女教員を勤め、夫婦兩稼ぎをする人であつた。この時私はつくづく借家生活なるものゝ不安さと情なささに厭氣が差したのである。然し世の中は方便にできたもので、すぐ其の家の向ふに一番差ひの十九番地を貸せると云ふから、見掛けも内部もゾツとせぬ随分ひどい粗末な家ではあつたが、もう何んなどころでも選り好みはしない、近いだけに引越しの便利なのが取り柄だと、向ふの粗末な借家へ轉げ込んだのは三十七年の夏、家賃は三圓七十錢、云ひ出し四圓で、三十錢は、氣は心でお負け

をして呉れたのである。

私の借家史

(七)

K町十九番地の家主は向井たること云ふお婆あさんであつた。おたる婆あさんは、其折六十四五歳でもあつたか、麥酒樽のやうに肥太つて、家鴨が火事見舞に往くやうに、ひよこくんと歩くけれども、口は達者で盛に氣煙をあげる女丈夫肌の、確かりものであつただが、女家主であるだけに、兎角借家に手を入れて呉れぬ。それと云ふも二つの借家からの家賃の収入が殆ど生活費の全部になるほどの世帯であつた爲でもあらう。家の前は杉垣になり、垣から六尺退いた建物との間に井戸がある。間取は前が六疊、中が八疊、その奥に長四疊の鞘の間があつて、三尺幅の縁側を下りると、古い梅の木と、柿の木のあつる若干の庭。長四疊に並んで庭に向いた六疊、此の外に上り口の三疊と板の間の台所でこの家にも床と云ふものはない。若し強ひて勝さつた所を求めらば、眺望のきくこ

とであつた。庭は田圃につゞいて、神通川の土堤と土堤を隔て遠く五福の桃林迄も見渡された。尤も後ろ田圃の道路は聯隊への本道となり、兩側はびつしり建物の屏風を立てられてしまつたから、今日では爾うは往かぬ。此家に就いて書かねばならぬは、無暗に鼠の居ることであつた。古い家で壁などは崩れ落ちてゐる。それを匿す爲に怪しな山陽外史の書いた屏風を壁に打つてあつたが、屏風の紙がむくく動くので調べてみると壁と屏風の中間は鼠の巢窟で、數疋の大鼠が飛び出したあとに、六疋の子鼠がうよよと動いてゐた。天井には幾十幾百の鼠群が居るのか知らぬけれども、晝夜の別ちもなく天井を駆け廻る音の騒々しさと、其の都度鼠の糞と塵埃とを室内に雨ふらす猛烈さには呆れ返つてしまつた。古い天井板には無数の穴が明いてゐて、夜になると其の穴から下に寝てゐる私の様子を窺ひ、ぼかんと口でも明けて居らうものなら、しめたど計りで鼠の一家眷族は我が室内へ闖入し、勝手次第に振舞ふ。まだ電氣のない時分で洋燈を點じ、寝るときは夫れを消して置くため、何うかすると着て居る蒲團の上でダンスを始めることもあつた。さすが温厚の君子と雖も、事ここらに及んでは睡眠を妨げられ、衛生を害し

生命を縮める虞があるので、あらゆる捕鼠器を買入れてみたものゝ、苦い一度の経験で次からは捕鼠器の前でせせら笑ひをやるばかり、しまひには其の捕鼠器をがつたんことごとんどんこ、鼠共が何處へか運搬し掠奪し去つたが、多分夫れは参考品として天井裏國の博物館に陳列したのであらう。此の時である私も大いに發奮して鼠退治の武藝を練り、一夜に二三頭、多い時は四五頭を撲殺し勇名を友人の間に馳せたものだ。之れを以て世間では、私を猫の性だらうと云ふさうだが、干支のなかに猫は居なかつたと記憶する。その當時の日記には今日は何頭撲殺と一々克明に書き入れてある。東京であらうものなら交番へ持参して、一廉の収入を得たかも知れないが、武藝も其の用ゆるところ非にして金持にもならず、結局怪鼠窟を借家の打ごめとして、私はK町で手頃の家を買取つたので、富山に於ける私の借家史は之で終りを告げた。

富山の洪水

泥々蟲原野で出水騒ぎに出遇つたとき、私は富山の借家時代を懐ひ出さぬわけに往かなかつた。初めて富山の水を見たのは、十造屋形に居るときのこと、十造屋形の前後左右悉く浸水し、とりわけ其の後町には用水路のあるのと、地盤の低いため、川ぶちの道路は四五尺の水量であつた。井戸の中にランペの長い蛆が浮いたりする不快の家であつたけれども、あの部分だけ妙に地盤が高いのであると云ふことを出水に依つて發見し、それが十造屋形の取柄だと思ふた。其の翌年、中山方でもまた出水騒ぎがあつた。當時私は赤十字社富山支部の首腦井上是致さんと懇意にして居つたが、是致さんの談により、先年大洪水の折、是致さんは私の住んで居る中山方に居てひどい目に遭はれた顛末を知つた。水が天井に届くと、天井を下から突破つて一同屋根の上へ出た。そこへ握り飯を配る舟が廻つて來たけれども、舟底が杉垣と門とに支えて、屋根際へ近寄ることができぬので、舟の中から握り飯を屋根に向つて投げつけたとは振つてゐる。それから後私は殆ど毎年のやうに洪水に遭ひ、舟に乗つて浸水の町々を、のたくつたばかりでなく、或とき

布瀬堤防の様子は何うかと、頼まれもせないので堤防見廻りの最中、足の下の下土がこぼれ落ち込み、落ち込んだ下の方から勢ひよく川の水の突進し初めたには驚いた。その歸路の布瀬と長柄町とは胸まで達する激流で、深いところでは、水の上へ僅に首ばかり出るやうなあんばいであつたから「海豹になつた記」を書いたりなんかして、毎年梅雨の時分になると「又水は出ないかな」と椿事の起るを心待ちに待遠く思ふほどであつた。出水量は神通橋の水量標でわかる上に、洪水と云へば縣官の重立つ人々は先づ神通橋の巡查派出所へ立ち寄りもし、水防隊は神通橋の流失を警戒するので、洪水氣分は此處を中心として緊張した。夫れ故私は派出所に陣取り水の姿について少からず學ぶところがあつた。ゾラの若いときの短篇にガン河の洪水を書いたのがある。あれを讀むと物凄うことは此上もないが、肝腎のガソンの濁流が何う云ふ調子であつたかの寫生を缺いてゐるので遺憾がある。それよりか子規派の俳人で、寫生文家であつた、東京深川の牛乳搾取所主人伊藤左千夫君の、洪水に遭つた實驗記の方が面白い。ついこの間の朝鮮大同江の洪水で、平壤の町が濁流の間に没したことを、國境鴨綠江の沿岸に同様の被害が

あつて、死屍累々たる慘狀を呈したと云ふことを聞いたときにも、私は其の慘狀をまざまざと想像することができた。之れについて朝鮮から來る雜誌などの中に、何か其の實驗を書いたものはないかと氣を付けて居るけれども、今にそんな文章は見當らぬのが物足らぬ。

洪水の傳説

(一)

洪水傳説は有らゆる傳説のうちでも最も古い傳説であるが、洪水傳説中の有名なものと云へば、舊約全書にあるノアの洪水が動かぬところだ。或るヤン學校で舊約の研究と云ふことをやつた節、此の書が世界最古のものだと斷定を下すについて、随分面倒な考證を書き取らせられた。そこで之れを世界最古の書として、その開卷劈頭の創世記に、神が人間を製造してみたものと、何うも人間共が悪いことをして始末に終へぬので、大いに後悔し、生物を地上から拭ひ去つてやらうと思ひついたとある。然し退いて思案すれ

ば。折角拵えた藝術品を根こんざい無くするも本意でないから、義人ノアの一族だけを
 残して置くことに決心し、此旨をノアに諭し、角形の舟を造つて洪水が出たら其中へ入
 つて居らせることに打合せができた。ノアが舟を造るのに何ヶ年を費したかと云ふ一點
 だけは、其の他の記事の細かなのに拘はらず書きもらしてあるけれども、兎も角も樹に
 屋根のついたやうな角い舟が出来上つた。すると七日目から洪水が出初め、ノアの年齢
 六百歳の二月の十七日に、水源悉く缺潰し、天の蓋が開け、降つたも降つた四十日四十
 夜降り通し、樹舟は地上十五キュビトの水面に浮んだが、此の時には世界の山嶽は水中
 に沈没してしまつたとあるから、地球の表面は水に包まれたわけだ。水漬にすること百
 五十日、鼻から息する物は大抵皆死んだと見て取つて神さまは水の手を止め給ふたとは
 痛快も此に至つて極度に達する、嘸すつきりした心持になり給ふたであらう。かくて百
 五十日を経て減水し、箱舟は七月十七日アルメニアのアララト山巔に漂着したが、十月
 初めに山々が水から現はれ、翌年二月二十七日最早大地も乾燥したから、保健衛生上差
 支無い、そろ／＼箱から出たら好からうとの神の仰せであつたから、用心深いノアは舟

から出て、蕃殖事業を開始した。出水のときはノアが六百歳の二月で、地上から水の涸
 れたのが六百一歳の一月、それで洪水後尙三百五十年生きたとあるから、死んだのは九
 百五十一歳になる勘定なのに、舊約書には「ノアの齡は都て九百五十年なりき、而して
 死ねり」とあるのは、誤算でなければ出たらめに書いたんだらう。當時ヤソ學校でなせ
 私は左様な誤算をば黙つてゐたか。之れも出たらめに聽いてゐたんだらう。但し教師は
 此の世界的洪水が正確の事實であつたと教へ、舜帝時代の支那の洪水が即ち夫れであつ
 たと、支那歴史を裏書に代用した。私はまた單純であつたのと、わざ／＼支那歴史を對照
 するのがチト臆劫であつたから、ノアの時代が舜の時代に當るか何うか、聊か怪しいと
 は思ふたものゝ、まあ／＼そんな事にして置いたものだけれども、そんな事にして置く
 となると、全世界に於て苟くも鼻から息する生物をすつぱりと拭ひ去つてしまつて、箱
 舟の中のノア一族だけをタネモンとして残して置いたと云ふ記録の信用を破壊せられる
 ので困つたものだ。鼻から息する生物が虱の取りのこしのやうに、うよ／＼と襟裏なら
 ぬ支那大陸方面にたかつてゐた事を神さまも御氣につかれなかつたと見える。だから大

掃除には壘を叩いて、箒を床下迄入れねばならぬ筈である。

洪水の傳説

(二)

ノアの洪水はノアの六百歳のときの二月に初まつて、六百一歳の一月一日に水が地上から涸れたと云ふから、約一年かゝつたのであるが、禹の洪水は甚だだら／＼したものであつた。堯帝治世六十一年に洪水が出て始末につかぬところから、崇伯侯鯀に治水の命が下つた、コン君四千兩の報酬で之れを引受け土木を起してみたけれども一向に効果がない。九仞の城を作すのみにして九年の績を用ひて訖に駄目だつたとあるから、先づ以て常願寺砂防工の失敗位のところだ。然し仕合せなことに民衆は安く業を樂めりあつて、皆無事で鼻から息をしてゐたらしいから急性的瘵殺的なノアの洪水と大分性質の差つた慢性的疾患であつたのだ。コン君は罰によつて誅せられ、次の舜帝時代にはコンの子孫に治水の命を下された。流石の禹も之れに大いに當惑し夜の目も合はぬ不眠症神經衰

弱に罹つてゐると、神さまが現はれて黄帝の水經を授けた。之れを見ると赤文綠字で書いてあつて、色盲には一寸困るやうな代物であつたけれども、禹は締めたどばかり喜んで、先づ九州から手を着け淮水に及んだが、淮水には一寸手古摺つた。すると又夢に神さまが現はれ奇法を教へた結果、工を興すに崖崩るゝと雷の如く、七百餘里頃刻に疏通するとある。七百餘里の改修が頃刻で竣工するほど故、全部日數高々一週間位だらうと思つてはいかん、舜帝喜んで曰く、卿が水を治むる、勤勞して外に住まると二十三載にして三度び其の家を過ぎて妻子を顧みずして其の門に入らずと聞けり。朕思ふに聖心誠意に非ずんば安んぞ能く此の如くならん。何度うちの前を通つても家へは立寄りせず、十三年かゝつたとは昔の人は根氣が強い。時に帝も最早百一歳の老翁となり之れで安心したと重荷を下した氣持ちで、がつくり弱つて崩せられた。してみると舜帝の長い一代を通じて洪水が絶えなかつたらしい。舜帝時代とノアの洪水と時代が同一でないかと取調べる書物は世界の何處にもないから鑿穿は無用であるが、聖書學者の希望通り、支那上代の洪水がノアの洪水の飛沫だつたとすれば、ノアの箱舟の漂着したアルメニアのア

ララト峰あたりが洪水の中心點で、支那は中心を外れたのだ。随つて中心點だけは人間の驅除が有効に行はれたけれども、世界の邊疆に於ける驅除は頗る不完全であつたとして此の比較對照は之れで打切りにして置いて差支ないのであるが、こゝに聊か珍妙な事がある。それは人類學者鳥居龍藏さんの支那苗族研究中、彼等の方に禹の洪水よりも寧ろノアの洪水によく似た洪水傳説が存在することだ。

洪水の傳説

(三)

支那四川の南部と雲南とにコロ族と云ふのが住んでゐる外に雲南の麗江附近の金沙江畔とにモツソ族と云ふのがゐる。是等が所謂苗族で、前者は獮猓の文字を用ひ後者は磨些の文字を用ひられて居る。毛物扁に羅及び果の文字は面倒であるから、こゝには扁を省畧して羅果と書き、假りにロロスに當てはめて置く。鳥居さんも同じく此二字は實に奇妙なる文字で支那人は古くから之れを使つてゐるのであるが、唐のときの盧龍部とある

のが之れだと説かれてゐる。ところで支那人が西南夷と稱して卑しめてゐるところの此の羅果族は象形文字に似た一種特別の文字を使用し、古くから神話及歴史を書き傳へてあるが、其書方は左行から書くのださうだ。さてこの羅果族の所有する神代記には創世の顛末をば、天の創造期、地の形成期、宇宙乾燥期、宇宙洪水期などに別ち、天及地の區別のできなかつた時代に在つては晝もなく夜もなく、太陽もなく月もなかつたと共にこの時には勿論地上に一人の人類も無かつたとある。此點は我古事記に酷似してゐるばかりでなく舊約の創世記に「元始に神天地を造り給へり、地は形なく空しく、暗き深淵の表面に在り神の靈水の面てを覆ひたりき。神光あれと言ひ給ひければ光ありき。神光を善しと見給へり。神光と暗とを分ちたまへり。神光を晝と名づけ、暗を夜と名づけ給へり」とあつて、次に海陸を區分し乾ける土を地と名づけ、水の集まれるを海と名づけ給へりとあるのが、ロロスの宇宙乾燥期にびつたり符合し、それからぼつ／＼人間の出現に及び、人間一掃大洪水に及ぶ。羅果族の傳へる洪水談によると、創世後に甚だしい地上の乾燥期があつたあとで、洪水時代が來た。その時四人の兄弟があつて此の三男一女

は何うしたわけか洪水ある事を前知し、兄は鐵の箱に入り、次の兄は銅の箱に入り、弟と妹とは木の箱に入つて、待受けてゐると洪水が地上を覆ふて二人の兄は溺死し、弟妹だけは生命を助かり、木の箱はモウトウ山の中腹の岸に生へた樅の木の上にかゝつたので、竹の枝に取違つて岩上に達した。兩人は箱の中へ鶏の卵を携へて入つたところ、夫れが箱の中で孵化して啼く。その時に箱の戸を開くべしと命せられたと云ふことだ。誰に命せられたのかばんやりしてゐるけれども、恁麼場合には神さまが申されたと解して置く。堯舜時代の洪水傳説は書經をみても史記をみても、箱舟避難のお伽風な點がないにも拘はらず、ロスの洪水傳説は大分ノア物語に近く、箱舟が出たり、舟が高山に留ごまつたり、減水期に鳥類を使つたりするところは異曲同巧である。何故近い支那民族の洪水傳説に似ないで遠いヘブライの古書傳説に近いのか、その邊は學者でも分らぬらしく「私はこの神話と支那の洪水談とは元同一の所から出た話か、別々に起つた話か諸君と共に研究すべき一大問題だらうと思ふ」と鳥居さんは言つてゐる。一大問題だか一小問題だか知らぬけれども、何しろちと變挺古だと私は思ふ。

洪水の傳説

(四)

支那の古書に大越史記全書と云ふのがあつて、此書には安南のことを書いてある。然るに此書の中にも洪水傳説がある。尤も之れは受賣り紹介で、原書を知らぬのであるからぼんやりの上にはぼんやりしてゐるけれども、筋は雄王の時代で、王の娘に媚娘と云ふ素的の美人があつた。見ぬ戀に憧憬した蜀王から之れに結婚を申込んで体よく拒絶せられてしまつた。雄王は娘を片付けたがよいと、廣く好配を捜してゐると、或時山の精と水の精とがやつて來て候補者たらんとを乞ふた。王曰く、女はたつた一人であるのに豈兩賢を得んや。それちや日を約して當日の先着者を採擇しませうと出た。王は運動獎勵家であらせられる。之れは面白いと、選手二人は了承したが、當日山の精が先着したのでいよく中原の鹿は山の手落ち、結婚式は立派に高峰に於て行はれることになつた。失敗者の水精は嫉妬に堪へず、お手の物の雲を興し雨を降らせ激水を漲溢させ水族を率

ひて花嫁を奪取せんと企てたので、王と山精とは鐵條網を水中に張つて防禦策を講じた。そこで水の精は別江から大江に出で他江に入つて各所に無數の淵と潭とを作り水を積んで水攻めの手段を取つたけれども、山精もさるもの竹を編んで籬を作り、水勢を防禦すると共に、矢を飛ばして敵を射つた。鱗介諸種は箭に中つてはたゞ倒れ總敗軍となり目的を達せずして退いた。此の結婚式の行はれた場所は越山の絶頂であるとなん目出度し／＼。本文の註に曰く、山精と水精とは之れ後世の誓、毎年大水常に相攻む。平たく云へば、恁麼事の有つた爲に後世長く山と水とは中が悪いのであるさうだ。成程水は山嶽を崩壊し、崩壊する山嶽は水流を塞ぎ止めるところを見れば、いかにも彼等は喧嘩をしてゐるやうでもあるが、其の實山と水とは夫婦の如く親友の如く、山は水を呼び水は山に就き兩者の交情は未來永劫離れるときがない。彼等は提携し聯合して、時々人類にいたづらを試みるのであるから、大越史記の山水兩精の鞘あては聊か辻褄が合はぬやうだ。唯こゝに馬鹿を見たのは蜀王であつて、化けものの爲にまんまと戀女をシテやられた器量のわるさよ。それは夫れとして此の洪水はノア傳説とも型が違ひ、禹の傳説

とも行きかたを異にして、自から又別派の洪水傳説に屬して居る。

洪水の傳説

(五)

大越史記の安南洪水傳説と行きかたの似てゐるのは、越中の姉倉比賣神話である。此のはなしは富山藩野崎雅明翁の肯構泉達録に載せられてある。雅明翁の泉達録は其の父なる傳助と云ふ人の書いた喚起泉達録の散佚したことを遺憾として、之れを完成したところから、何處までが息子さんのもので、どこ迄がお父さんのやつたのか、其の區別は喚起と肯構とを對照してみれば判る。姉倉傳説は原書のと後書のと書き方は差つてゐるけれども兩書共に夫れがある。そこでこんな神話をどこから引き出して來たのかと私はいろ／＼調査した結果、伊勢の或神書のなかにあると云ふことだけが分つて來たけれども肝腎の其の神書なるものが手に入らぬので、該神書の原文をどんな風に變更してあるのか、どれだけのお負けが付いてゐるのか其の點は不明である。それから又伊勢の神書と

云ふだけでは頗る漠然としてゐて、誰人の手になつたもので、其の記載事項は何から引つ張り出したのかと云ふ事も一切不明である。専門家で暮すやうな人は、こんな事にも、閑と金をを費し伊勢の古書舊記類を入念に穿鑿するともできるだらうが、左様な真似のできぬ私などは先づ好い加減なところで、済ませぬことをも済まして置く他はない。閑話休題、姉倉傳説の洪水神話と云ふのは、昔昔の新川郡の船倉山に姉倉比賣と申す女性の神があつて、其の亭主は能登の補益山の伊須流伎比古であつた。然るに夫婦が兩國に離れ／＼に暮してゐる以上碌な事は起らぬものにて、亭主神はつい其の附近に住む能登杣木山の能登比咩と情交を結び、三角戀愛を形成した。正妻姉倉嫉妬の爲に戦争を開始し、布倉山の布倉媛は同情應援に及び能登を攻撃したので、能登側では加夫刀山の加夫刀比古が能登比咩の尻押となつて氷見の宇波迄進んで逆襲し、能登は海軍であるから暴風を起し海嘯を越中の山嶽に濺ぎかけた。此地方戦亂を鎮定せんとして中央より大己貴命が出張し、一体女の身として焼もちを焼くのが不都合であると云ふ多妻主義大己貴一流の見地から、先づ姉倉を船倉に攻めたとき、姉倉は方七里の大池水を開放し平

原に大洪水を氾濫させ寄手を防禦したと云ふのであつて、この傳説を眞面目に聴けば歴史以前に於て神通川に大々の洪水のあつた證據となるべく、能登軍が宇波に進んで海嘯を山嶽に浴びせたと云ふのは、歴史以前に於て越中海岸に猛烈な海嘯があつた左券ともなるであらう。

越中の洪水 (一)

越中の洪水傳説は、姉倉一件の外に同型同派のものがまだ他にある。之れも傳助翁からの受賣りであるが、材料の出處は神社の縁起か何かであらう。日置村鎮座石勢比古命と賣比川鎮座大野玉額西比咩と夫婦であつて、日置の大將は勢力隆々として新川平原一圓を支配してゐたところ、布勢鎮座倉稻魂命嫉妬心を生じて戦争を開始し、海水を平原に瀾漫させ、日置夫婦を溺死させんとした。日置は萬策盡きて、早月神社八心大市比古命及び其夫人這槻比咩だのと協議の上、平野を洪水から回復すべく、越中山神の御大雄山

の神に應援を申請した。雄山神も一寸小首を傾け、さあそこだて、布勢は北海方面に實際的關係が廣いから中々以て優勢である。何よりも先づ此の背後勢力を牽制せなくてはなるまい。之れが戦略として雨水を用ひて海濤を防ぎ、一方山嶽軍を進め敵の援軍を喰ひ止めるがよいと云ふので、降雨術を知つてゐる配下の神十九座に出動命令を下し、即時雨を降らせ洪水を起し、日置夫婦を援けて布勢軍を逆襲すべしとあつたから、大市比古は十九座軍隊の先鋒となり、大岩川の上流獅子峰を本營とし雷鳴地を震はして雨を降らすこと／＼「年月と久し」とあるから、ノアの洪水の四十晝夜ぐらゐではない。之れが爲に洪水滔々として山々は瀧を成し、谷に漲り岩を崩し石を流し、濁流大地を突いて何者も之れに近づくことができぬやうになつたさうだ。傳助翁考證していふ、越中の言ひ傳へに「一千年雨が降つて高原山を崩し、其の残つたのが今の野だ」と言つてゐるのは此ときの事であるさうだ。是に於て布勢神も亦負けぬ氣になり海波を越して陸の洪水を押し戻さうとしたが之れは無理だ、自然の方則が許さぬ。洪水は後陣金軸に阻んで入替はり入交り海水と攻戦ふた爲、布勢も大いに疲勞した。此体を見るや大岩川の上流獅子峰

に立つ大市比古並に日置は十九の雨神と力を合せ、いよ／＼洪水を盛にして北海にイクヂドを築いてしまつたから、布勢軍及び其兩軍は進むことができず、潮をあげて逃げ去つたのである。此の時に出現したイクヂドは大市比古の名を取つたもので、市比古土と書くのを後世生地にしてしまつた。依つて十九雨神は洪水を回収したけれども、唯一神をして萬一の防禦に當らしめた。此の一神は新川の神であつて、防禦線は即ち常願寺川だ。常願寺川は此時大平原一面の洪水の名残りである。ざつと言へば右やうな次第であるが、常願寺川ばかりを太古の遺物として、自餘の黒部、早月、神通、庄を無視したのが分らぬと、詰問してみたところで、何分雲を攪むに等しひ神話的傳説だから始末にわるい。然し雷鳴豪雨、山に瀧ができて谷に満ち岩を崩し石を流し濁流大地を突いたと云ふ洪水の順序は合理的であつて面白い。

叔羅の異説 (一)

喚起泉達録の著者野崎傳助翁は、神秘主義者であつたと見えて、凡慮では一寸見當の付かぬ奇妙な考證をつける癖がある。萬葉集にある大伴家持の和歌に叔羅川を詠んだものが二つあるけれども、叔羅川は今日何處に在るか分らぬので、私などは神通川の一部分であらうぐらゐに當りを付けてゐたところ、傳助こそ蘇金先生によれば、それはトンでもないことで、叔羅川と姉倉洪水とは密接の關係があるさうだ。今之れを紹介するに當つて先づ其大要を述べると、姉倉比賣が舟倉山に立籠つて大洪水を越中平原、少くとも神通平一圓に氾濫させたとき、大貴已命が其洪水を地上から地底へまで埋み込んでしまつたのが、幾千年後の今に至るまで存在してゐる。即ち其洪水の遺物を叔羅の水、又は叔羅の川と云ふのであるさうだから、科學者の云ふ地下水なるものに該當するわけである。傳助翁の叔羅論は立山を出發點として斯う云つて居る。雄神川に三つの瀧があり、一は雄神の瀧、二は勝田の瀧、三が叔羅の瀧であります。雄神の瀧は立山神社の御洗であります。勝妙の瀧は雄山の神社の御洗であります。而うして叔羅の瀧は手力男の

御洗であります。然し此叔羅の瀧を見た者は有りません。名はあれども實際見ることができぬは抑どうしたわけかと云ふならば、是れは即ち山根土中にある瀧なるが故であります。奇体ですな、地底に水が瀧をなすとは合點が参りませんと小首を傾けるだらう。うむいかにも、さもあらん、さもさうづ、之れには不思議なるいわれがあるのです。此處で勿體ぶつた咳の一つもして説き出すこと下の如し。雄山の南に並んで舟倉山があります（雄山が舟倉山と肩を並べるとは諒解に苦しむけれども、そこが神秘主義と思はれるから中言無用）舟倉山は水情甚だ多し（水情は水量の誤りでは有りませんかなどど要らぬ邪魔をしてはならぬ）水情が多いもんだから此水汎濫して人民が生立たぬ。大貴貴が越中の國造りをするに當つて、この大洪水を治定することを先決問題となし、舟倉の水を撃ち去り、山を砕き沼地を埋めて之を平均せられた。するとさしも満々たる平原に瀰漫した洪水は一ヶ所に集まつて屏息した。この水の屏息したる山を今呼んで大貴貴の峰と申して居ます。どこにそんな山があるかと問ふ人に教へてあげる。其の峰は飛越の國界にあります。併も大貴貴の峰の絶頂に七里四方の巨大な池があつて大己の池と申

します。これが舟倉の水であります。と先づこんな調子であつて、聽いてゐると分るやうで分らぬ。要するに神秘主義者の頭だけに諒解せられるものである。はなし尙あとに續くのだが、こゝらで一息を入れて置く。

叔羅の異説

(二)

傳助翁の大己之峰は參謀本部の陸地測量部で作つた地圖などに載つてゐるやうなもので無い。載つてゐたとして迎も之れに該當するものを發見せられまいと諦めてゐたところ、翁は當今の山の名は扇ヶ嶽と云ひ、舟倉の水を扇ヶ池と云ふ。世人は山の形狀が扇に似てゐるからの名稱だと考へてゐるけれども、夫は抑間違ひで、大己の峰が訛傳したのだと考證を下し、さていよいよ叔羅論へ進む。翁の曰く、俗稱扇ヶ池、本名舟倉の水は、一体もとゞ大己貴命の作業によつて、越中の大洪水を一纏めに此處へ洪え込んだものでありますから、此の池水は大雨數日降り續いても水量の増加するとはございませぬ。

さりどて池水には排泄口が無いので、何處から何處へ抜け落ちるのか神秘的不思議であります。分らぬも道理で、水は山根を流れ去るのであります。山根と云ふのは地底のことでござる。地底を潜行して遠く平原へ出で去るのであつて、此の地下水をば叔羅水と申すのです。も一つ云つて聞かさうならば、今扇ヶ嶽と云ふ飛越國境の山嶽が叔羅山でありますけれども、今人は覺えがわるくて叔羅山とは呼ばず、隨つてまた叔羅川が地下を流れることも忘れてゐるのであるのださうだ。此地下の叔羅川の水は何うかすると地上へ湧き出る。井戸を掘つて冷たい水が出るのは叔羅川へ掘り當てたのだ。それをば知らずして、世人は、禹の川除に掘りあてたなどと云ふ。禹の治めた洪水は唐土の地下を流れるか知れぬけれども、越中に於ては大己貴命の治めた舟倉の水即ち叔羅の水が地下を流れてゐるのであつて、加賀の青野と云ふ所へ吐き出てゐる。之れを佛事に擬して偈の水と云ふ者もある。又叔羅水は越中に於て時折地上に湧き出ることがある。それには時季のあるので四月初めから七月初めにかけて、殊に梅雨時期には多量に出る。此の時期には玉を吹き出す事さいある。春冬二季には叔羅の水は地上へ顔を出さぬものだ、先

づさつとこんなものであるが、加賀の青野とは何處の事やら説明はない。又何故にそんなところへニューツと現はれたのか之も理由は分らぬ。傳助翁は更に大伴家持の和歌に「叔羅川夏さへのほり平瀬にはさてもどこかにをどろきこめる」とあるは意味深長で地下水を飲んだのだと、途方もないこぢつけを平氣でやつてのけた。然し家持の別の和歌には「叔羅川瀬を尋ねつゝ我越せば鶴川たゞさね心なぐさに」とある。地下水に鶴飼をやつてゐる筈もなく、又それを見て心をなぐさめた筈もない。家持のうたは地上の風景を詠んだもので、叔羅川は賣比川、碎田川などと同じく越中の何處かの川たるは疑ふべくもない。ところが面白いことは、傳助翁の息子さんなる雅明翁は、おやぢさんの叔羅論を抹殺し、肯構泉達録に於て「叔羅川は堺川のことと、此川は宮崎から海へ入り、此處に叔羅海苔と云ふ名物があると云つてゐる。

越中の地震

(一)

洪水傳説を辯じ居る折柄、思ひも寄らぬ關東震災來に話の腰を折られてしまつたから、方向を轉換して演題を地震譚に書き改めた。元來越中は震災のない地方で、たまにあつても格別の損害とてはなく事済んでゐる。然し天正十三年の全國的大地震には、彌波方面がひどくやられてゐる。東部はどうであつたか記録の乏しいので判明せぬ。天正十三年と云へば、富山の佐々成政が降伏した年で、事件も落着をづけ、秀吉は九月に歸洛してゐる。夫から家康を招いて、我輩今は關白になつたものと、何分其身元が知れてゐるので幅が利かぬ。君さへうまくやつて呉れれば、諸侯も畏服するだらう、我輩を殺すも活かすも君の心一つだ。宜しく頼むと脊中を一つばんと叩いて置いて、新築の大坂城で正式に家康を引見しべこゝと頭を下げさせたり何かやつたあとでの地震が來た。上方の話は省略して、加賀の前田利家は越中の平定に依つて重荷を下した心持になり、長男利長を守山に入て三郡を統治させ、自分は上洛して左兵衛權少將筑前守の辭令を受けた。其辭令を受けたのが十一月廿九日のとで、地震は其廿九日の夜半に始まり、震動時

間は非常に長く、揺り返し／＼て翌日になつてもまだ熄まず、それから十二日間即ち十二月十日まで毎日のやうに揺さぶつた。礪波方面では庄川上流に山抜けがあつて、庄川の流れを堰止の二十日ばかり停留した水を一時に押出して來た爲、大洪水となつて沿岸の耕地及び人家を流失し、河川の状態などは一變してしまつた。山抜けのあることは豫知せられたので、沿岸各村の住民は何れも安全地帯の増山、守山、井波などへ避難し、縁家のない者は小屋掛けをして暮してゐたが、北國の冬季で山地は云ふに及ばず、平野にも相當に雪が積つてゐたから、立退避難には容易ならぬ困難が伴ふた。そのうち出水があつて流勢も定まり、最早大丈夫と見定めて夫れ／＼歸宅するものもあれば、家屋を失つたものは居所を移轉したので、洪水に由る人命の損害は少かつた。然し地震の爲に庄川上流白川の人家三百は住民と共に山の缺壊と共に墜落して全滅となり、富山へ行商に出てゐた者六人が、變を聞いて歸村してみると、居村の跡を留めないもので、空しく又富山へ出て來たと云ふ慘話もあり、號外ものゝ出來事としては、利家の弟右近秀繼夫婦が居城木舟城の倒壊によつて壓死を遂げたことである。

越中の地震

(二)

寛文八年五月五日の大地震には、北陸地方に多少の被害があつたらしい。越中の古書越中舊事記には、五月に大地震があつたと書いてゐるけれども、之れに關する記録は薩張り手に入らぬ。次で寛延三年四月の地震。之れは越後に大被害があつて、能生、名立あたり山崩れの爲交通杜絶に及び、越中から下街道を江戸へ往くことができなくなつたらしいけれども、肝腎越中の模様は分らぬ。それから寶暦元年二月二十九日の大震に越中も波動を受けたさうだが、矢張り記録がない。天明二年七月十五日の大震は、富士山が鳴動して東海道は大分やられ、富山高岡も珍らしい震動であつただけで、被害の有無を知ることができぬ。かくて愈安政の大震に及ぶのであるが、安政の地震は元年十一月四日と、二年十月二日の夜と、同五年二月二十五日との三回あつた。江戸の大地震と云ふのは、二年十月の秋の地震のことだ。其の筋の調査では死者二萬五千三十九人、潰れ

家一萬四千三百四十六、焼失延長二里十九町、此の火口三十などあれども、實際は十萬人以上の死者を生じたらしく、火災の火口の三十も不正確で五十ヶ所とも云ひ六十ヶ所とも云つてゐる。ところで此の秋の地震に越中は格別の被害を生せなかつたと見えて地方被害の記録は見當らぬ。五年二月二十五日早春のものこそ越中の大變で、例の大齋小齋の崩壊は此の時であつた。之れに關しては留書類も中々豊富で、之れらを一々書き立てる段になれば際限もないほどである。そこで先越中に記録のない元年の分から書くこととして、この程わざ／＼高島幸吉君から示された書類をナマの儘で掲載する。之れは地震のあつた翌々日、江戸の京屋と云ふ者から飛脚に托した書狀である「當日四日辰の刻、東海道大地震、小田原宿四十五ヶ所大損、箱根宿七步通り潰れ、三島宿残らず潰れ、明神より東へ二丁程焼失、宿内残らず潰れ、田中宿同様、残らず潰れ焼失、沖津宿大津浪にて流れ、駿府御城内水天守崩れ町中等残らず潰れ、宿内残らず焼失、清水湊大つなみにて流れ、豆州下田邊同様、無事の家は二三軒ならで御ざなく候、藤枝宿より上は未だ相分り申さず由承り申候、十一月六日、京屋」之れでみると今度の震災でやられ

た東海道各地は地震と海嘯との大慘害を受けたのであるが、江戸には格別の損害を生せなかつたらしい。

越中の地震

(三)

此の地震は關西方面の波動が相當にひどかつたと見え、地震のあつた三日目の七日に、京都から、京都、大阪、大津、奈良、伊勢方面の影響を早飛脚で知らせて來た。其の文面は下の通り「當月四日辰刻、京都大地震、餘程永行き同五日申刻同様、同夜戌刻にも同様、其の後折々ゆれ、御諸司代様、兩町奉行様、月番御火消、御所へ御固め遊ばされ彦根様、加茂邊へ御巡見成させられ候處、急に御戻り直さま御參内遊ばされ候、當六月十四日夜の地震同様候へ共甚だ永行きの由に御座候」之れでみると、安政元年の地震は六月十四日の夜に大震があつて、更に十一月四日に一層念入りのものがやつて來たのである。さて上方被害は京都には格別のこともなかつたらしく、何とも記してないが、

大阪其の他は稍詳はしい「一、大阪表右同刻大地震にて京町堀羽子板橋北詰南西角家四五軒潰れ出火いたし候へ共、早速打消し、駕籠屋町、西國橋東辻突出火いたし是れ又打消し申し候、外潰れ家四十三四ヶ所ばかり、土藏納屋等荒れ損じ申し候由、申刻同様、同夜戌の刻の頃海中震動いたし、津波にて大阪市中汐満ち安治川口邊に繋ぎ之れ有り候船々、川口へ押入り大黒橋邊まではせ込み船々損じ、其筋橋々、道頓堀川筋、金屋橋、住吉橋、幸橋、汐見橋、水分け橋、堀江川筋黒鐵橋、長堀川筋高橋、江の子島龜井橋、安治川橋流失いたし市中へ二尺餘水揚がり申候由に御座候」それから大津「一、大津も當夏同様の地震にて御屋敷損じ申す由に御座候」京都大津間はつい鼻のさきであるけれども、當時では大津の状況が分からなかつたらしい。次は奈良方面及び其の他「一、奈良郡山伊勢邊等、當夏同様の地震にて神社佛閣等大いに損じ申す由、三州岡崎大地震の由にて人家多く潰れ、矢作橋落ち損じ、濃洲養老瀧崩れ申し候由、江州彦根様御城御櫓崩れ申し候由風聞御座候」末文には「右當月七日京都西の刻出立つ早飛脚へ詰人共より傳書を以て申し來り候に付御達し申し上げ候以上」とあり終りに「上方中使濱岡屋彌兵

衛」の名がある。次が安政二年十月二日夜の江戸大地震で、越中には何の損害もなかつたが、江戸に於ける加賀富山の本支藩邸は共に皆多少損害を受けた。此地震に關する記録は極めて豊富であるから、今更事新らしく述べ立てるに及ばぬけれども、當時江戸から飛脚に托した二通の急報を載せ置く。之れは翌三日の晝四ツ時即ち午前九時頃大火最中差立てたもので、飛脚は四日目の午後一時頃に加賀藩領へ到着して居る。其の文面は左の通り

一、先づ御屋敷に於ては大御門續き日蔭町長土塀皆潰れ南御門腰、瓦屋根瓦落ち建物大痛み、車御門會所續き皆潰れ、但新番小屋迄同斷怪我三人即死二人、又二人行衛不知
二、富士御屋敷、大聖寺御屋敷御様子相知れず、方々様當御館へ御移り
一、土塀々々押廻し皆潰れ長屋々々皆潰れ痛み人不知
御殿御損じの模様不承

一、山手、麴町、赤坂、四ッ谷、芝口、淺草邊火口多く諸方萬燒
一、昌平橋より下谷、本江、音羽邊より火の手二十餘口、此火筋遠見付御門へかゝり御

所見へ来る

- 一、公儀御城炎上の体、夫れ故此方様へ一番手大御目付を御願ひに付一番棹に相成る
- 一、右火事中也地震一向止まず
- 一、御屋敷より見候へば刀屋町より火口相立後は菊坂火口其外火口所々より起り候て數不知

一、江戸中所々火に相成り候故男女遁場之れなく死人計り難く大變至極と申す事此の急報は煽々たる火中に書かれたもので、文章の簡潔なのは取急いだ結果であらう。之れを今回の地震大火に比べてみると、互に似通つた點甚だ多いとに心付くであらう。

越中の地震

(四)

上記の飛脚に次いで四日の夜江戸を立つた飛脚は、十日の四ツ時に到着した。之れは途中六日間を費して居る。此の第二信は被害概況で、其の文は下の通り「淺草田町より馬

道以前、大臣門前、猿若町三丁目、材木町、駒形、黒門町門跡前、菊屋橋際少々、下谷廣小路松坂屋邊より御徒町、三枚橋邊、御城海道小笠原様御家中屋敷石川様其の外御屋敷程、又子津新町より萱町通り榊原御中屋敷下た一向宗寺地淵共残らず、高無塚坂富山様總門際まで、坂本町一丁目兩側共又吉原残らず、又京町、桶町四五十軒ばかり、又本所二ツ目より四ツ目まで、又御丸の内酒井様上下屋敷、大岡肥前様肥後守様、池田様其外御大名多く又山の手、小川町本江丹後守邊より護持院が原邊より御屋敷も餘程焼失いたし荒増ヶ所」以上が被害あらましの状況で、加賀藩の被害については「屋敷様御長屋御會所東御門續き御長屋御作事方、捨子小屋並に二十間ばかり、東方御番所、御屋敷内橋屋向ふ御馬場土塀残らず、又御在居石門方土塀、同火消長屋多分潰れ候、御在居御本宅女中部屋其外御間毎損じ候由、以條は(以上は?)山崩れ、又中屋敷土塀十五六軒ばかり倒れ八十軒御長屋向ふ御門の御長屋少々損じ」外にこんな地震の概況報告もある「當月二日夜四ツ時大地震にて潰れ家のヶ所數知らず、其の上火十餘ヶ所、先づ下谷茅町邊り、三枚橋邊、淺草邊り、吉原、小石川、本所、芝口、京橋邊、大名小路多く焼失伊賀

守様奥方即死遊ばされ候由、死人数知らず、吉原ばかりにても二千人計りと申す事、御屋敷内土塀大方倒れ即死三人、併し其外怪我人多分に之れ無く、御住居火除御土居潰れ女中部屋潰れ候由、併し本江は一番△(不明)と申す事、江戸七歩ばかりも潰れ候由十餘ヶ所も一時に出火誠に恐ろしき事限りなし、昨夜も残らず野宿致し候、御住居前へ二丁目通りより参り座取野宿いたし申候、諸商賣致さず候由「公私の飛脚が頻々として報道を持つて来たことは、之れで想像を付けられる。然し以上は越中の地震ではなく、他地方の地震に關して報道せられた記録の越中に遺つて居るものであるから、今度は安政五年の越中の地震に及ぶ。

越中の地震 (五)

尙十一月九日に江戸出發の飛脚に托した加賀藩坊主衆からの概報を載せる。

一、昨日四日(書面は震災の翌日に書いたのである)辰の半刻、駿州大地震にて駿府御

城代初め御小屋残らず潰れ市中火事出來、御城も破損少からず御座候由

一、下田大地震其の上大津波にて市中七歩通り流失、湊に繋ぎ之れある船残らず行方不知に相成り候由

一、筒井殿始め罷越され御役人旅宿流失之れあり候へ共立退き無難に致され候由

一、川路殿は具足類流失致し候由

一、侍分のもは無難の由、下に至つては怪我も之れあり、様子相分り申さぬ由に御座候一、魯西亞無難に罷り在候

右の通り風説御座候旨申上げ候早々。

十一月六日

ここに魯西亞とあるは、露本國のことか、それとも來航中の魯艦のことでもあるのか、まだ穿鑿はしてみないので分らぬ。別に又十一月十日京都發と思はれる東海道被害概報でこんなものもある。

一見付 半潰れ

- 一府中 江川町より出火三步通り焼く
- 一袋井 丸焼け
- 一江尻 同
- 一掛川 同
- 一興津 津波にて半潰れ
- 一月坂 無難
- 一由井 同
- 一金谷 大焼け
- 一かん原 問屋より東焼け跡は半焼
- 一島田 少々焼け
- 一岩淵 半潰半焼
- 一藤枝 半焼
- 一富士川 水無し歩渡り

- 一岡部 半潰れ
- 一吉原 丸焼け
- 一丸子 同

此外荒井、津波にて潰れ是れより東いまだ相分り申さず候」と茲に「是れより東」とあるをみれば、此の手紙は關西から出したことは明かである。後に出す別の手紙には、上方仲使濱岡屋彌兵衛の名が記されてあつて、多分兩者共發信者は同一のものであらう。

越中の地震 (六)

今回の大地震當日、東京は珍しい位の晴天であつたが、唯一塊の綿のやうな白雲が天の一方にかゝつて、其の雲の形ちが牡丹の花のやうに見えたこと云ふ事を遭難者が口々に語つてゐる。安政二年の江戸大震當日も同じく晴天で、五年の越中大震當日二月二十五日は既に暖氣の催してゐる時分で、一點の雲もない晴天でありながら、朝から北風が吹い

て寒さが身にこたへる程であつた。晩景に及んで風は吹きやみ、空は綺麗に晴れて星がきら／＼光つてゐた。然るに其の夜半、翌日の明け八ツに近いころとも云ふ、大震が起つて、富山城の石垣を崩し、富山市中には多少家屋の損害があつた。然し家屋の損害よりも何よりも重大な災害は、常願寺上流の大鳶山が壊崩して水の流れを閉塞したことがある。その爲四月二十六日山間の溜水一時に決潰し、沿川の大洪水となり、百四十人の溺死者、千六百十餘戸の流失並に潰家を生じた。私の聽いてゐるところでは、此時の大震は二月二十五日の夜一回と云ふことであつたが、安政五年三月十七日付を以て洩物改め人冬江村源兵衛、同見習人伴源五郎兩人から郡奉行所へ書き出したものには、下の如くに記してある「先月二十五日夜の地震にて、有峰下も崩れ出で申し候處、當月十日又候地震にて。立山湯本より十三日に三里計り奥にて堰留め川筋道程四里計りに横三里計り深さ一里水溜り、右三里に四里計りの間湖水の如くに相成り申す様子に御座候。湯本より三十丁計り下にも川三筋御座候由、湯本の川一筋十三日に切れ流れ申し候處、常願寺川へ流れ出で、右兩淵のうち東方多分村々八十ヶ村餘土海の如く相成り申す由人家土

中に相成り或は川へ流れ出、死人大數四百人餘相損じ申す由、半死半病人數不知、牛馬同様の由に御座候。右死人の内土中より首を出し相果て候者も五十人計り見受け候者よし承り申し候。其の外手負人の儀は相知れ申さず由に御座候……」之れで見ると三月十日に再び地震があつて大溜水は其の結果のやうである。そればかりでなく三月十三日に夫れが決潰して洪水を起した事になつてゐる。恐らく之は何かの錯誤とは思へども、四月二十六日の大變よりも約四十日以前の日付で、こんな報告を出してゐるとは面妖などである。面妖と云へば此の洪水に際してさまざまのヨタを飛ばした者があつて、今日ならば流言蜚語の罰金十五圓位は受合ひのところ、格別咎め立てをせられもせなかつたと見え、其の大ヨタをば眞に受け圖まで入れて書き留められたものだ。其の一例は圖に示すやうな怪物(圖は略す)が常願寺川筋岡田村等の川原へ、洪水前の二月二十七日晝八ツ時に、彼之れ十二三人計り現はれたと云ふので、徴兵検査官が壯丁と間違へて検査したのもあるまいに、御丁寧にも體尺迄調べてあるから面白い。

長さ 三尺ばかり

色合	赤黒き方
眼色	金色の如く
角長さ	五寸計り色鼠
鬼齒	二寸ばかり
髪	ちぢなり茶色
爪手足共	長き方
鳴き聲	かすりたる方

地震と魯船

安政元年東海道方面から關西にかけての地震の報告中に「魯西亞無難罷在候」とあるのが一寸判らなかつたところ、考へてみると、其頃は英露の開戦中で、七月十五日四隻の英船が長崎へ來港し、日本の諸港に碇泊の自由を許さんことを求め、八月二十三日到我

れと條約を結んだ。そして二十九日に英船が長崎を去ると九月十七日に魯船が攝海に現はれ、十月下田へ來た。下田で筒井肥後守、川崎左衛門尉、伊澤美作守等應接談判する手筈になつてゐたところ十一月に入ると彼の地震。何しろ英船の後へ、英の敵國たる魯船が來たのであるから、此の談判は舉國の一大心配であつた。それで變災の爲魯船が沈んで呉れないものかなと誰しも頼みにならぬことを頼みにしたのであるが、沖合にはちやんと魯船の姿が見えるので「魯西亞無難罷在候」とやつたのだ。尙別の書面にも「去る四日辰の半刻、下田表地震津波にて市中流失致し、御用金も流失に付直に昨日御用金二千兩御兵糧共江戸より御廻し相成候由に御座候、一ヲロシヤ船は先づ無事の様子に御座候、一同所かねて出張の太田攝津守、大久保加賀守人数は行方相不知趣に御座候、一諸役人筒井初め山手へ立退き致し候へ共下々は行方相知れさす由に御座候……」などとある。ところが實はヲロシヤ無難ではなく、散々な目に遇つたので、當時の民衆詩人は例の諷刺俗謠を作つてゐる。

ひよんな津波にアイウエヲ

魯西亞で頭をかきクケコ
 破船の修理をサシスセソ
 俄に御小屋がタチツテト
 二度目の早風ナニヌネノ
 やうく岸迄ハヒフヘホ
 手足は砂にマミムメモ
 船には綱付ヤイエユヨ
 どうく沈んでラリルレロ
 夷人は涙でワ井ウエオ

魯艦は下田の地震海嘯に大損害を被つたので、下田附近に借地して修繕工事を始めるやう申出た結果、幕府は君澤郡下戸田村を指定した。依つて戸田浦へ廻航途中其の一隻は暴風に遭つて沈没した。で己むを得ず戸田で補充再造に着手し、我國の船大工も其の工事に雇はれ實際智識を得たを幸ひ、是等の職工をして、戸田で我が軍艦を造らせ、安政

三年完成君澤形と名づけ、引つゞき水戸の旭日丸もそこで出来上つた。かくて安政元年の大地震は一面に我國文明の上に、殊に國防の上に大した利益を與へたわけである。因にヲロシヤの戸田に於ける造艦修繕の完成に近いとき、十二月十一日佛國船が下田へ來たので、ヲロシヤは之れを襲撃せんとしたところ、佛船は下田を去つた。そこで同二十三日魯國との條約は下田で締結調印せられた。

地震と英雄 (一)

「地震加藤」の地震は慶長元年七月十二日の變災で、陰徳大平記で見ると、地震前の七月三日午の刻、天候が急に惡變して烈風砂を飛ばし、其の砂の中に葦毛馬の毛のやうな物が交つて降つて來たので、京都洛中の民衆はアシゲな事だとか、ケたいな事だとか言ひ合つてゐると、閏七月十二日の夜大震動が始まつた。洛の内外に潰れ家が何戸あつたか死者が何ほどあつたか、當時代の警察當局は記録を遺さぬので、頗るばあつとしてゐて

同書には唯、増して洛中洛外の市店民屋或は傾き或は倒れける程に、壓されて死する者幾千萬と云ふ員を知らずとあつて大雜把なものだ。それから又大地裂けて一丈二丈の穴をなし、山岳崩れて泥水湧き、大石轉じて巨木折れ、誠に三災劫末の時至りて水火四禪天にや上らんと萬人聲を揚げて泣き叫びける形象、八大地獄も斯くこそあらめと覺えたりと形容せられてある。天下の諸侯に課して大土工を起した堅牢無比の伏見の新城すら此時石垣が崩壊したばかりでなく、柏崎物語でみると伏見城の樓閣悉く破損すどあり、野史には伏見城の殿宇樓壁頽壞し、墜死するもの數百人とあるから、太平記の形容も大ヨタとは思はれぬ。此ときは征韓役の最中であつたが、加藤清正は召還されてゐた。之は三成と反目し行長か三成と一本になつてとんでもない報告を秀吉へ送つた。清正が朝鮮に於て日本大將豊臣清正と稱し悪事の有だけを仕盡してゐると云ふので、秀吉の自尊心は清正の威張りやうが癢にさはつたから、歸京しても面會を許さぬ。随つて冤を雪ぐこともできず、こんな馬鹿々々しい事はないと憤慨して、家に寝轉んで怠屈してゐたとき此地震であつたから、部下二百人を率ゐて伏見城へ駆け付け、我君は御無事かと問

ふた、秀吉は妻子と共に城内の庭で蒼くなつてゐるとき、戦さの苦勞で瘦て黒くなつた清正の顔を見ると氣の毒の餘り、猿みたいな目からはらくと涙を流した。女共は貰ひ泣きとやきもちの上手なものであるから、お付き合ひに皆涙を出した。斯うして清正はまんまと地震で信用を恢復したわけである。三成も抜からぬ男であるから早速駆け付けたけれど、清正が中門を守つて「何者だあ」とやつたからさくつとしながら「僕は治部だ、僕を中門に入れない奴は誰だ」と、少年時代の美貌が唇下の御役に立つた以來の勢力を見せびらかしたので、清正は團州張の聲を張りあげ「門を守る者は主計だ。疾くから來て侍衛の任に當つてゐる。汝はほんとの石田治部に間違ないか朝鮮人ではないか。治部とすればなせこんなに遅く出て來た」と朝鮮の喧嘩を伏見に持越し門の内外で唯み合つた。

地震と英雄

(二)

徳川家康も城内へやつて来たが、之れは秀吉から特別待遇を受けてゐるので、秀吉も相當挨拶を交換した。家康は先づ御無事でお目出度うございます。ついでには此際速に内の御けしきをお伺ひになつては如何でせうと云ふ。秀吉は我れもさこそ思つてゐたのだが従者が揃はぬので困つてゐた。それぢや幸であるから徳川殿と一しよに参り、従者を其のままお借りすれば好都合であると云ふので、徳川の従者ばかりを連れて出た。それが秀吉の茶目で、こんな變災最中にでも一寸芝居をやつてみる氣になつたものと見える。秀吉は直ぐ刀を脱いで、此頃久しく佩刀したことが無いので腰が重くてどうもならん、徳川殿の從臣の内に持たせて貰ひたいなあと云ふ。家康は又始まつたなと心中おかしく思ふたものと、然らば持ちませうと自分で刀持をして行く。それでは却つて心苦しくていかん家來へ渡し給へと秀吉が餘りしつこく云ふので井伊直政へ渡した。それだけで黙つて居ればよいのに、秀吉は自分のやつた芝居の筋が皆に分らないではつまらんと思つたものか、遅れてかけつけた豊臣側の家臣が揃ひ、輿に乗らうとすると、徳川自慢の

本多忠勝を招き、どうだお前は今日ぞ秀吉を討つに好い機會だと喜んでゐたであらう。然しお前の主人はそんな客なことをする男ぢやないよ。先刻實はおれの刀をお前に持たせやうと思ふたのだが、折悪く隔つてゐたもんだから間に合はなかつて残念だつた。お前に渡したらきつと面白かつたに相違ないなどと蛇尾を添へて打壞してしまつた。陰徳でみると、此時御所へ行くまでの間に秀吉はまだ一つ茶目をやつたらしい。京都へ入つて大佛の前を通るとき「弓を持つて来い」と云ふから、臣下が雁でも居るのかなと、變な顔をして弓矢を差出すと、秀吉は左弓に能く挽て大佛へ一矢射かけた。勿論大佛は金であるから痛痒相感せず、矢はばりりと落ちた。落ちる落ちないとは秀吉の關する所ではないので、此時に大佛に對つて大音聲で叱り付け、天下安全の爲の大佛が大地震を制止することが能きず、吾身さへ崩れたのは何たる曠職失態ぞやと云つた。然し大佛は相變らず平氣で何とも答へず、頗る呑氣に濟ましてゐた。大佛が地震を制止できなかつたとして、それは我の責任でないと、大佛は言はなかつたけれども、扨從した人間は皆爾う思ふて笑いたいのを、いかにも大佛が不都合であると云ふやうな表情を見せねばならぬの

で、そこが工合のわるいものであつた。それ故陰徳太平記の筆者香川景繼は「物狂はしく見えにけり」とやつた。

地震と英雄

(三)

伏見の地震當時前田利家も同地に滞在中であつたけれども、利家の行動は、陰徳太平記にも書いてなく、柏崎物語や武家閑談などにも出て居らないので、一向に分らぬけれども唯一つ利家夜話に伏見地震の折の挿話を見出すことができる。之れでみると孫四郎様の地震小屋で、大納言様を御振舞になつたと云ふことだが、孫四郎とは利長の弟前田利政のことで、大納言は其の父利家のとで、即ち地震の翌日か或は翌々日あたりであらう。利政は父を招待したわけであるが、往つてみると地震小屋の普請に似合はず、其の設備中々善美を盡してある上に、料理の如きも山海の珍味を集めて頗る行届いたものであつた。一体利政と云ふ人は兄利長の周到老實な思慮に似合はず、燕趙悲歌の急進主義者で

勇氣に富み精力に充ち、引込み思案大嫌ひな性質であつたから、地震だからとて何も左様に謹慎したりまづいものを食つたりする必要はない。平時も變災時も無差別たるべしとの考へであつたのだ。利家は折角の馳走に招かれて苦い顔をするはお互ひに不愉快であると思ふて、いや大變振つてゐるぢやないか位のところで、其の折は引取つたけれども、後ほど岡田嘉右衛門と齋藤刑部の兩人を使ひに立て、利政に意見を述べた。意見に曰く、一体全体地震小屋などと申するものは、出来るだけ輕便簡素なものにするのがほんとうだ。然るにお前の地震小屋は堂々たる立派な邸宅であるにはワシも驚いた。左様なことは入らざる儀だ。第一貴重な金銀を何と心得てむだ使ひするのだ。そんな贅澤濫費をやる結果人に不義理をしたり、他の物を欲しくなつたりするものだ。お前は苟くも一國の主となつたのだから、うか／＼と暮らしてはならぬ、平素お前の行動を見るに、武器、馬などの改善と整備とに意を用ひないで、ぶら／＼と鷹野に出かけたり、内に居るかと思へば三味線などをびん／＼鳴らせたりしてゐるらしいが、沙汰の限りだ。既に一國の主となつた以上は日本六十六人の一頭顱である。今後そんな無作法のことでは駄

目だぞと叱りつけた。利政のことだから老爺の意見で縮みあがるやうなことはなかつたであらう。折角御馳走をしたのに其の返禮にお目玉頂戴とは餘りに埋合はぬ話だと膨れ面をしたのであらう。それにしても孫四郎君が三味線を弾ひたとは大きに話せる。野田卯太郎君式に大食自慢以外に格別の趣味も藝當もなかつた利家の子としては慥に異型であつた。だから兄の利長とも兎角意見が合はず不平満々であつたのだ。

地震と天氣

地震と氣象の關係は、氣象台あたりで研究ができてゐるだらうとは思ふが、地震記には當日の天候までも調査することが能きなかつたらしいので、氣象台ができてからの資料と、それ以前でも近代の地震で比較的詳しく記録の存してゐるものだけを根據とする位のことであるから、恐らくそれだけの資料で正確な決定を下すわけには往かぬであらう。然し、今度の關東大震當日は快晴であつたと云ふし、安政五年の越中大地震も、夜では

あつたが晴天であつたと云ふし、弘化四年三月二十四日の信州の大震が矢張り同様であつた。武江年表によると、この二月八日から善光寺の開帳があつて大變な群衆であつたところ、淺間の煙が著しく減つたので、不思議だくと云つてゐるうち、二十四日の地震だ。此日は晝夜共珍らしい快晴で夜の四ツ時に震ひ出し、夜の明ける迄に八十餘回震ひ善光寺の民家は倒壊した上に火を起して焼き拂はれ、善光寺は本堂が横になつて残つたけれども、あとの建物は悉く焼けた。大地裂け、山岳崩壊し、犀川丹波川は洪水となり。水内郡には一村全滅したところもあつたが、此時の死者三萬人と呼ばれてゐる。安政二年十一月二日の江戸の大地震當日は、細雨時々降り夜に至つて雨は歇んだが、天色朦朧たりとあるから、之れは晴天ではなかつた。それから又元祿十五年十月二十二日の大地震は、宵から電が強く光つたとあるけれども、晴雨は一寸分らぬ。然し二十四日夜より雨ふち、翌曉に及んで降りも熄んだとあるに見れば、大地震の時は晴天で、雨が降り出すと餘震も次第に減じ、遂に揺りやんでしまつたらしく思はれる。地震の前兆は、事後に及んで心付くので、中にも妄誕のものもあるが其二三例を引くに、慶長元年の伏

見の地震には前にも云ふ通り獸毛のやうなものが降つたさうで、武江年表には之れを蠶と書き又氷毛とも書いてゐる。其の毛の長さ四五寸と云ふことである。元年十五年十月の地震には、電光強く雷のやうな地鳴りがしたとある。善光寺地震の前には淺間山の煙が少くなつたことは既に云つた。開帳前に善光寺門前へ高札を立てたが、一夜にして紛失したから、更に建てること又無くなり、三度目には番人を置いて監視させたので紛失せなかつた。之れ即ち凶變の豫告であつたと傳へてゐる。こんなのは安政の江戸大地震に關して澤山言ひ觸らされた。安政見聞録、見聞誌などを初めとして、小さな綴り本や一枚橋の地震記に記された奇妙な前兆談を集めるばかりでも中々面白い。

地震の研究

地震に關する書物と云へば、大日本史百七十一卷災異之部に載せてある地震記ほど貴重なものはない。地震記は允恭天皇五年に起り光孝天皇の仁和五年に終つてゐるから、此

間の年数は四百五十二年で、地震の日数は六百四十であるが、皆月日までを明記し、中には時刻を書いた分もあるばかりでなく、其の土地を特記したものもある。土地を特記したのは京都に關係のない地震であつて、其の他の土地を特記せない分は、皆京都に於て震動を感じたものであると一般に解釋せられて居る。右六百四十のうち京都感觸の地震は六百二十六日である。尤も此の記載に漏れた地震も少くなかつたであらうが、それにしても能くも之れだけの調査ができたことと修史界では誰しも敬服せない者はない。要するに大日本史編纂當時にはまだ史料が豊富に存在してゐたから、今日私等の想像する程大した苦心を要せなかつたかも知れぬ。地震記の記載はなせ允恭の五年に始まりそれ以前に及ばなかつたのであるか、その事情は分らぬけれども、察するに以前の史料が容易に求められなかつた爲であらう。さすれば神武即位から允恭五年迄の地震は、日數に於て幾百幾千あつたことか固より知る由もない。そこで地震の週期研究者は此の大日本史の地震記を大切の根據とするのであるが、そんな事で價值のある豫測を下し得られるか何うか、ちと覺束ないやうに思はれるけれども、之れは専門學者の畑のことである

から容喙を避けて置く。地震研究者は地震記の記事に「地震す」とあるものと「大に地震す」とあるものと、地震前後に變兆あるものと、山嶽を壊崩し人畜を死傷したとあるものなどを五つに區別してみたり、更に之れを月別にしたり四季に別けたり、寒暑に兩別したり、いろ／＼にして觀察した結果、下の斷案に達した。尤も之れは帝都を中心としてのことである。

一、強震は凡そ五十九年目に一回来る

一、稍強大の地震は凡そ二十年に一回来る

一、地震の多いのは八月で、十一月が之れに次ぐ、

之れを季節で云ふと、秋が一番で次は夏秋だが、春の地震は最も少い。最も之れは大体觀察であつて、十一月も下旬となれば冬氣候で、天正時代にあつた越中の大震には雪が降つてゐた。それから又春の地震は比較的少いと云ふ迄で、弘化四年の信州の大震、俗に善光寺大地震と云ふのは春三月二十四日の出來事である。随つて春だからとて油斷はできぬ。氣象臺ができてからは、學術的の調査と記録とができてゐるから、それ以後の地

震に就ては正確な材料を具備してゐることと信する。もう既に地震に關して史的の編纂をやつてゐる人々も少からぬやうに見受けるから、いづれ遠からぬうちにそんなのが雜誌に出たり、單行本となつて現はれたりとすることであらう。

地震の番付 (一)

安政二年の江戸大地震後に出た、地震に關する小冊子だの、一枚摺の輕文學類は、數限りもない中に、地震と大火を對照した番附がある。尤も杜撰なものであるけれども、近代の大火大震として江戸の人々がどんな物を數へ擧げたかと云ふ事が分かる。此の番附の編纂者は署名して居らぬけれども「日野要賢齋藏版」とあつて、大火方の大關は明暦三年の丸山本妙寺振袖火事、地震方の大關は弘化四年信濃善光寺開帳地震で、安政二年江戸並に關東八州大地震と之に伴ふ大火事は勸進元になつてゐる。關脇は大火方が明和九年、目黒行人坂の大火、地震方が文政十一年の越後國大地震。小結びは大火方が文化

一寅年の高輪牛町の大火、地震方が嘉永元年の小田原地震。あとは前頭で其の順位は次の通り

- (一) 文政十二年、和泉橋際からの大火
- (二) 天保五年、佐久間町二丁目からの大火
- (三) 弘化四年、本郷丸山からの大火
- (四) 嘉永三年、麴町の大火
- (五) 弘化三年、青山からの大火
- (六) 天明八年、京都の大火
- (七) 安永七年、江戸の大火
- (八) 寛政五年、根津の大火
- (九) 享保九年、大阪の大火

之れに對して地震方の前頭は左の通り

- (一) 寛永元年、關東の大地震

- (二) 安政元年、大阪の大地震
 - (三) 寛政十年、小田原大地震
 - (四) 元祿十六年、關八州大地震
 - (五) 天和三年、日光の大地震
 - (六) 文化九年、關東の大地震
 - (七) 安政元年、信州大地震
 - (八) 同 年、紀州の大地震
 - (九) 同 年、播州の大地震
- 之れ以下になると大火方では

- 享保三、江戸大火
- 天保二、江戸大火
- 寛文元、京都大火
- 天保五、江戸大火

天保二、江戸大火
 安政元、江戸大火
 安政二、江戸大火
 安政元、江戸大火
 安政元、神田大火
 寛政四、糺町大火
 嘉永、京都大火
 寛政、中國大火
 寛政、南部大火
 安政元、中仙道大火
 同 東海道大火
 同 大阪大火
 同 宇都宮大火

大地震方では

安政元、攝州大地震
 同 甲斐大地震
 同 駿河大地震
 同 遠州大地震
 安政二、船橋大地震
 同 神奈川大地震
 安政元、阿波大地震
 同 伊豫大地震
 安政二、中仙道筋地震
 同 東海道筋地震
 同 水街道中地震
 同 日光中地震

同	上總大地震
同	下總大地震
同	北海道地震
同	秩父大地震

地震の番付 (二)

此番附にある寛永四年の關東大地震と云ふのは八月であつたが、寛永年間にはまだ數回の大震があつたので、之れを詳しく云へば同七年六月二十三日、十二月二十三日、十年正月二十一日及び二十二日及び十二年正月二十五日で、中にも、十年正月は諸國の大震であつたから番附はよい加減のものだ。それから番附に落ちてゐるものでは正保四年五月十三日、慶安二年六月二十日、八月二十日、同三年三月二十三日などがあつて、二年六月のは江戸に於ても大々的のものであつて、上野の大佛は此時に破砕したさうだ。下

つて寛文二年三月二十四日、九年八月十一日、それから元祿九年六月十九日、十五年十月二十二日など皆落ちてゐる。中にも元祿十五年の地震と來ては大變なものであつて、附物の大火も凄じいものであつた、其の概況をかい摘むと、地震當夜八ツ時に始まつて地面は五六尺も割れ裂けて砂を揉み上げ水を吹き出し、地震と共に出火して大火となる一方には海嘯が起つて、房總地方と小田原方面の被害多く、小田原と死者二千三百人、小田原から品川迄に一萬五千人、房州で十萬人、江戸は三萬七千餘人、このうち兩國橋にて死んだもの千七百三十九人と云ふことで、深川の三十三間堂は此ときに轉覆してしまつた。地震數日引續き、二十四日夜雨が降り出すと小揺りになつて二十五日には全く熄んだが、其の後十二月まで時々餘震が來た。それから寛永になつて元年二月二十七日と、三年九月十三日の二回。享保になつて三年三月四日。天明には二年七月十四日、三年二月二日、六年二月二十三日、明和には八年五月二日、六月二日、寛政には五年正月、六年十一月三日。是等の地震も番附に漏れてゐる。番附にある文化九年の關東大地震と云ふは、十一月四日の地震であらうが、左程のものではなかつた。文政九年の春には屢

地震がなければども所載がない。弘化四年三月二十四日の信洲大地震は大關に据えてあるが、それよりは元祿十五年の江戸を中心の武、房、總、相、四國の被害は大きかった。安政の地震以後に番附に上す程の大震は、明治二十年一月十五日午後六時五十三分の神奈川の地震、二十二年熊本大震、それから二十四年十月二十八日、濃尾の大震が最も大のもので、二十七年六月二十日に東京近傍の地震、二十九年六月十五日午前八時三陸の大震海嘯、之れが随分悲惨なものであつた。次いで三十三年八月十日午後三時に、陸奥國八戸近傍に相當大きな地震があつた。

地震と大鯰

地震譚もそろ／＼鼻につき出したから、この邊で打止めにする。鯰説の根據は物識りに聽かなければ確かとしたことは分らぬけれども、支那傳來であることだけは疑ひもない。大地の下には大鯰が生棲して、平生は辛抱強くじつとして動かぬけれども、どうかした

拍子に其の尾鰭を動かすと大地が震動するのであると云ふので、我邦では正直に之れを信じ、大鯰を恐れること一方ならず、斯かる怪物は神靈の力に依つて封じ籠めて貰はなければならぬが、其の役目には何神が適任者であらうと選擇推薦の結果、鹿島大明神に限る。鹿島大明神は邪神鎮定に特別の手腕があるから大鯰も敵はないだらうと云ふことになつた。斯う決定してみると、又いろ／＼の想像説が現はれて、鹿島神社の要石に根が生へて午莠のやうに地底深く突入し、其午莠の劍さきで大鯰の頭を抑へてゐるから、さしもの彼奴も動くことができないのだ。然るに鹿島明神の要石がサポタージュをやるど、之れを機會に鯰が荒れ出す、安政の大地震も偏に其の爲であつたと、當時の民衆には解せられたのである。安政大地震の出版物「鯰太平記」なるものに、安政二年の初冬出雲國に於て八百萬神の總會があつて、日本國中大小の諸神は郷土を離れ、鹿島明神も同じく出張不在であつた爲、大鯰が荒れて大地震を起したのだ。當時無線電信でなくとも、せめて電報電話が有れば好かつたのに、そんな物の無かつたところから、留主の屬僚神から、出雲へ飛脚を差立てたので、鹿島明神は變を知つて馳歸り鎮定に従事した。

こゝに鹿島の股肱たる要石之助はぬらくらだつた鯨共の間に飛込み、髭をつかんで叩き潰し當るを幸ひ取押へ、首領の大鯨を捕縛し、盤石を以て壓伏した上に監視を付けた、之が即ちジシン番だなどと洒落のめしてある。尙其の外に鹿島神託所から鯨一統へ申渡し状と云ふのもあつて、それには、八百萬の神を恐れざる致し方ヌラチ至極に付、四ツ手を以て一疋も洩らさず擲ひ揚げ、蒲焼き所に於て骨抜きの上、火あぶりにも行ふべき所、格別を以て神國一圓追放仰せ付けられるものと云つたり、厄拂ひの文句にぬらくら物の鯨めが、悪く尾鰭を動かさば、鹿島の神の名代に、此の事觸が押へ付け高天が原を打越て身もすみ川へさらり〜云つたり、三河萬歳の文句に、騒動起した鯨なんぞはふん縛ばつて鹿島へ參る。之れからは續いて善い事ばかり參る。お客なんざあ朝から晩迄引切なしに參ると祝つたりしたものだ。

江花 波蘭陀

(終)

編輯後記

此度、本會設立の趣旨に賛して、
 多大の共鳴と激動を賜はりたる同好の君子に對して、深く感謝の意を表す。予は今更、江花翁の人物や事功に就いて、敢て喋々申上ぐるの愚を繰り返さぬ。唯、江花會の如きは今日迄、生れざるべからざるべくして、生れざりしもの。今日之を見るを得たるは、あまりにも當然であり必然であり自然である。予は寧ろその遅かりしを怪しむ位だ。唯、此の上は秩序ある成長を庶幾ふのみ。

江花翁の多年の述作、凝つて珠となり、積んで堆を成す。今、隨筆、紀行、史編、小品、詩歌、日記等、

千紫萬紅にも似たるその舊什近篇を普く涉獵し編纂して、逐次刊行の機運に際會し得たるは、洵に地方文運のため、欣快禁じ能はぬ。

江花翁、夙に印刷の癖あり。自ら資を投じて出版印行、同友に頒贈したるもの、先に「黒部探検」あり。「江花文集」第一卷より第七卷に至るあり。近く「濠の藻草」あり。「古城の人々」あり。「松葉獨活」がある。公人の出資に據るものには「前田利長觀」あり。「利長卿と高岡の商工業」等ある。其の他、吉光片羽の斷簡短章等、一々之を擧ぐるの煩に堪えぬ。

之等を除外して、未だ世に示されざるもの、未だ書冊として纏められざるもの、猶幾十篇なるを知らず。先づ隨筆「波蘭陀」を選んで印刷、「江花叢書第一卷」として世に問ふことにした。次に表はるべき第二卷は何ぞや、第三卷は、第十卷は、而して第二十卷は。吾等の座右に堆積する、その書目のみ單に想像するだけでも、如何に快活であるよ。

本篇は大正十二年八月稿、翁が古城池畔の假寓より、移つて南郊泥々虫原野の野趣の中に、新居を構へられての第一作、翁一流の趣味ある、あの波蘭陀に近き階下の一室に於て泉聲をきり乍ら筆を遣りしもの。洵

に幽懐泉の如く湧き、好情、雲の如く生動する。その該博なる例證と、周密の研鑽とは、透徹の識見に加ふるに新鮮なる筆致と相俟つて、一讀直ちに此の随時の漫筆にも、翁獨擅の奇聞創造を看取せらるゝ。

本書の校正には翁自ら之に當つた表紙には高田玉雲、寫眞には前田甲印刷体載、其の他には、岡村直堂、古谷夢人、東城眞夫の諸君子、案を組んで克く考を練つた。吾等は之を以て充分なりとは毛頭思はぬ。若し本叢書に就その感想の一端を御洩らし下さるならば、それ豈、吾等のみの幸慶に止まらんや、切に同志の鞭撻と愛顧を祈る。(曉堂)

どうやら發行までこぎつけた。發起人會は、大正十五年二月二十日の晩、江花氏の宅を借りて開いた、

來會者は挿入寫眞の通りだ、だが此他にもう一人だけ、撮影の任に當つた前田君を忘れてはならない、席上種々、名論も出たが、生まれ二百部程の豫定で趣意書を撒くことゝなり、曉堂氏が書いて撒いた譯だ、もう會員は二百以上に達した。

本書、表紙と扉は、高多玉雲氏、寫眞版は前田甲氏、コロタイプは車健太郎氏の手で成した。厚く、これらの人にお禮申上げる、表紙の色彩が派手なのは、本巻「波蘭陀」も云ふ言葉が「ヴァランダ」に通じて非常に新しい感じを誘ふと云ふ發案者の意嚮で原色を重んじたためだとのことだ、次號、三號で又誰いものも見える。

此書の文が出来た八月頃は、江花氏宅のベランダは、涼み場、茶香場

であつた云ふことだ。

趣意書を撒いても入會者が少く最初は心配もしたが、富山の馬瀬清三郎氏の様に、一人で二十部宛も申込んでくる人もある、又申込書に豫納會費を添へて來た人も多い。又更に村井雨村氏の様に會費の外に寄附金二圓を添へた篤志家もある。

會費未納の人は至急拂込んで頂きたい振替口座番號は。金澤六四一二で、これは高岡市御旅屋町事務所倉田長太郎氏方だ、本會の事務整理上何回分も纏めて拂込んで貰へれば、尙好い。

本書は非賣品だ、會員外一部も賣らぬただ目下の處、二百余の會員に達したが、印刷其他の都合で余分も刷つた、此際の入會者だけは承認する、だが限りがある、又條件附だ、條件とは「第一號からの會員たるこ

と「前金拂込する、こと」だ。

第一巻は活版屋の奮發もあり、經濟が持てる、だが此点、編纂者も一生懸命だ、次號から、もつと好いものを出し、會員達にも満足な與へたい。それから僕の事を云つて濟まぬが、東城眞夫と云ふのは眞實は野村米二郎のことだ、別人の様に心得てゐる人のため斷つてなく。(眞)

云ひたいことは盡されて居るが、殿りに罷り出て、お目見得さして頂く。これが高座であれば眞打格で三ツ指つて台付の湯呑を捧げられ。オホ、ンとをさまり反る處だが、後へ廻るさ大した違ひ、まるで残りものを拾ひ集めるのだから割の悪いこと夥しい。

さて、ここで會員諸兄にお禮を申

したいことは、この企を一たび公開すると「此の擧のあるのを待つてゐた」ことか「編纂者の奮勵を祈る」ことか或は「江花先生の肖像を巻頭に掲げて欲しい」等々の激勵や希望やらが澤山舞込んだので、發起者一同其熱心さに頗る意を強ようした譯である

印刷部數も二百五十部から三百、五百と部數さい殖えれば内容も豊富に盛られ、立派な本を得られる譯だから最寄の人々を勧誘して頂きたい之れは營利が目的でないから諸兄の御努力は直接會員一般に報はれることなるので是れだけは是非共お願ひして置きます。

次號から此關の一部を割いて會員の紙上俱樂部のやうなものなを設け、短文で感想や批評、希望などを輯録したならみんなものだらうと思ふ。

けれども限りある紙面だから收拾は編纂者に委せて貰ひたい、其他春秋二回位會員の面談懇談會のやうなことをも計畫しては如何であらうと考いてゐる。

江花翁のお考では第一巻は翁の最も造啓の深い史談的のものとお希望もありましたが、何分繼續事業であり次から次へ出版するものですか最初は万人向のものさ云ふ見地から波蘭陀を撰んだ譯で、これも諒して頂きたい。

装幀は毎號變へることになつてゐますが、これも五冊十冊と纏まるさ色の調子や意匠の變化で、並べただけでもどんなに書架を美化させるだらうと、思ひ出してさい愉悅を感じる………と樂屋から獨り良がりな速べてパンを擱く………(夢)

江花會規約

- 一、目的：井上江花先生ノ舊什近篇ヲ編纂シ印刷頒布スルニアリ
- 一、事業：年六回文集一卷宛刊行シ會員ニ配布スルモノトス
- 一、會費：文集發行ノ都度實費（壹ケ年ナラハ參圓、壹冊分ナラハ五拾錢内外）ヲ申受ケ
- 一、編纂：文集ノ編纂ハ委員若干名ニ依リ適宜之ヲ撰擇ス
- 一、事務所：高岡市御旅屋町倉田精美堂内ニ置ケ

◎發起人

林喜太郎
 畑中久万吉
 岡村直吉
 片山繁次郎
 金子恕謙

◎贊

村井清貞
 國澤彌吉
 倉田長太郎
 山口林造
 古谷豊吉
 小島徳次
 篠島久太郎
 佐伯亮齊
 廣瀬喜太郎
 助馬瀨清三郎
 木津太郎平

◎編纂委員

岡村直吉
 野村米二郎
 古谷豊吉
 廣瀬喜太郎

◎寄附

本會維持費として左記の通り寄附申出ありたるに付感謝の意を表す

◎お願

本書の配布をお受けなされた方々は直ちに實費金五拾錢ですから振替口座を利用して拂込んで下さるれば好都合です
 尙本會に對する照會其他は左記へ願ひます

江花會事務所

高岡市御旅屋町倉田精美堂内
 振替口座 金澤六四二一番

一金貳圓也 村井清貞殿
 一金五圓也 南むら子殿
 一金五圓也 岡村直吉殿
 一金五圓也 廣瀬喜太郎殿
 一金貳圓也 古谷豊吉殿
 一金貳圓也 倉田長太郎殿
 一金貳圓也 小島徳次殿
 一金貳圓也 林喜太郎殿
 計金貳拾五圓也

大正十五年四月十一日印刷
 全年月十五日發行

著者 井上忠雄

富山縣高岡市御旅町五四番地

發行者 (江花會代表) 廣瀬喜太郎

富山縣能登郡野村水津二八二番地

印刷者 中山彌一郎

富山縣高岡市定塚町一・三三〇番地

印刷所 越中活版株式會社

富山縣高岡市定塚町一・三二九番地

終

